

---

# セカイはそれだけで十分なのだから

如月二日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セカイはそれだけで十分なのだから

### 【Nコード】

N8697V

### 【作者名】

如月二日

### 【あらすじ】

僕の望むセカイはきっと君の望むセカイじゃない

でもそれでいいんだ

だって僕は僕のために生きているんだから

これはとある新人賞に投稿して見事に落選したものです。

まあ、落選した理由は読んでいただければわかると思います（笑）  
あと、モバゲーにも載せています。

## プロローグ

「えー、今日は三時間目の古典は担当の先生が体調不良のため、自習になります」

朝。

学校。

ホームルーム。

担任の先生から告げられる今日の予定。

淡々と、何の感情の込められていない声で、担任の先生は告げていく。

「あと、今日の掃除当番は七班の生徒になりますので、忘れないように気をつけてください」

生徒もその連絡を特に反応するでもなく、聞いている。

ある者は、快晴の空を窓越しに見上げたり。

ある者は、昨日、夜更かしでもしたのだろうか、眠たそうに両目を擦っていたり。

また、ある者は、一時間目の数学の課題を、もう間に合わないだろうに、必死な形相でやっていたり。

しながら、聞いている。

そんないつも通りの朝。

いつも通りのホームルーム。

「えっと、連絡はこれだけだったかな？」

教壇に立つ先生は、手元に置かたいくつかの資料を捲る。連絡のし忘れがないように、確認をする。

「ああ、そうそう。あと一つ、連絡があります」

どうやら、連絡事項を一つ忘れていたらしい。担任は、多くの資料の中から、一枚の紙を引き抜いた。

そして、そのまま、授業が自習になってしまったという連絡をした時と、何ら変わらない口調で先生は告げる。

「昨日、大田正治君が亡くなりました。影に襲われたそうです」  
担任の先生の口から漏れた、クラスメイトの死亡という事実。  
ここでようやく、生徒は反応を示す。多くの生徒が、一番後ろの  
廊下側の席に視線を向けた。

昨日まで、大田正治という生徒が座っていた席へと、クラスの生  
徒の視線が集中する。

しかし、視線を向ける生徒の目には驚きも、恐怖も、悲しみも、  
何の感情も込められていない。

ただただ、その視線から発せられるのは

『ああ、だから、いなかったのか』

という、抱いていた疑問に対する回答を確認するための事務作業  
的な感覚。

「それでは、一時間目は数学ですので、準備をしていてください」  
「きりーつ。礼」

委員長の号令でホームルームは終了し、今日もいつもと変わらな  
い日常が過ぎていく。

☆

五年前。

都内の某所でその事件は起きた。

いや、もしかしたら、それ以前から、その事件、それに類似する  
事件は起きていたのかもしれない。

偏狭の地で。

人里離れた山奥で。

過疎の進行する村で。

誰にも「それ」による事件だと気づかれずに、起きていたのかも  
しれない。

しかし、そこは重要ではない。

重要な事は、世間に「それ」による事件として認識されたのが、五

年前からという事実である。

——影に襲われた

その現場を目撃した人は、口を揃えてそうコメントしている。

そして、テレビのニュースやワイドショー、新聞でその事件はセンセーショナルに取り上げられた。

『怪奇！影に人が襲われる？』

『被害者からは内臓その他器官全てが消失！』

『何ゆえの犯行か？猟奇的殺人事件に隠された真実』

『あまりにも不可解！集団催眠の可能性？』

こんな見出しとともに。

見出しの通り、被害者の体からは内臓など、目に到るまで、全ての器官という器官が引き抜かれていた。

猟奇的とも言える事件の直後、その場に残されたのは、死んだというよりも、強制的に機能を止められてしまった機械のように横たわる、被害者だけだったという。

しかも、目撃者の証言によれば、突如として現れた黒い、まるで奥行きを持った影のようなものの中に取り込まれ、その影が消えた後に残されたのが、その状態の被害者。

何ともSFチック。

何とも非現実的。

しかし、そうであるからこそ、この事件は前述のように、メディアによって嬉々として取り上げられたのである。

そして、その事件を、メディアを通して知った人々は、恐れや不安、気味の悪さを抱きながらも、それ以上の好奇心によって満たされたいった。

身近で起きた奇妙な事件。

つまらない日常の中で、久しぶりに起きた胸躍らせる事件。

連日、多くの野次馬が興味本位で現場を訪れた。

——しかし、本当に、甚だ疑問である。

人はどうしてこうにも、自分とは関係のない事に興味を持つのだろうか？

人はどうしてこうにも、自分とは関係がないから安全だと勝手に思い込んでしまうのだろうか？

なぜだろうか？

なぜ、その事件が、何の関わりもなく、何の前兆もなく、何の繋がりもなく、自分たちに降りかかると予想できなかったのだろうか？  
衝撃はそれから一週間と経たないうちに、日本全土へと広がることになる。

『えー、それでは次のニュースです。今日の午前九時ごろ、再び、内臓を引き抜かれて殺される事件が起こりました。事件現場は、都内の人通りの多い……』

『今日の午後一時ごろ、宮城県仙台市で影に襲われる事件が発生しました。被害者は五名に上り……』

『ニュースです。先ほど、京都府京都市の京極通りで修学旅行生が影に襲われる事件が発生し……』

駆け巡るニュース。

駆け抜けるニュース。

昼夜問わず、連日、テレビから流れ出る、影による事件の詳細。

それは、人々に、自分とは何ら関係のない事件だと思われていた事件を、自分もその事件の渦中にあると自覚させるには十分な衝撃を孕んでいた。

そこから、世界の価値観は崩れ始める。

じわりじわりと。

じゅくりじゅくりと。

実に気味の悪い感触を伴いながら、崩れ始める。

☆

そして、現在。

その事件について、報道されることはなくなった。

だが、誤解しないで欲しい。

「それ」による、俗に影と呼ばれるものによる殺人自体がなくなっただけじゃない。

単に、影による出来事が事件と呼ばれなくなり、ニュースとして報道されるだけの価値を持たなくなったというだけの話。

五年前から急速に増え始めた影による殺人は、現在に至るまで、無作為に、無差別に、場所、時間関係なく起き続けている。

当初は、警察なども各地に警戒態勢を引いたり、影が出現した地域をパソコンや携帯へとメール配信するなど、様々な手段を講じて事件の発生を未然に防ごうとしていたのだが、あまりにも頻発し、あまりにも神出鬼没で、事件後には直ぐに姿を消してしまう影に、徐々に対策の意味のなさが顕になっていった。

『影に対する何らかの対策を取る事は、今後一切ありません。私たち、警察が行うことは、事後処理と模倣犯の検挙だけになります』

最初の事件発生から一年後。

警察による公式会見。

そこではつきりと警察が、市民を守る為に存在しているはずの警察が、その義務を放棄したのである。

もう無理だと。

もう意味がないと。

しかし、そんな警察の方針に批判が集まることはなかった。

多少の動揺はあったものの、それ以上にはならなかった。

人々も、その頃には理解していたのである。

もう、何をしても影を防ぐことはできないと。

もう、何をしても影の恐怖から逃げることはできないのだと。

まるで、日本全土が憔悴しきったような空気に包まれていった。

——だからこそ、生徒は、ホームルーム時に告げられた、大田正



治という友達の死にリアクションを示さなかったのである。

もしこれが、不運な事故による死であるならば、生徒は大きな衝撃を受けていただろう。

もしこれが、自殺であるならば、生徒の中には泣き崩れる者もいただろう。

しかし、影に襲われての死は、あまりにも日常過ぎた。

生徒の感情を揺さ振るには、あまりにも在り来たり過ぎた。

今現在、年間の交通事故者数が五千人を切る中、影による死者数は五十万人にも上る。ほぼ一分に一人、影に殺されている。

一年通してみると二百四十分の一の確立で、影に殺される。

おぞましいとしか言いようのない数字。

しかし、だからこそ、影による殺人は日常と深く結びついてしまっている。

影に殺されるのは仕方がないと、人々の中で暗黙の了解ができてしまっていた。

既に、クラスの生徒も今年に入って大田ともう一人、園原という生徒、合わせて二人も殺されているのだが、その時も変わらず生徒の反応は往々にして、今日のホームルームの時と全く同じようなものであった。

世界はもうどうしようもないほど、狂ってしまっていた。

世界の価値観はどうしようもないほど、崩れてしまっていた。

当たり前の死などあるはずもないのに、当たり前の死があると、無理やりにこじつけることで、人々は影による死という現実を日常へと変えたのだ。

それが影に殺されるという事実よりも、遥に気味の悪いことだということにも気づかずに。

そうせざるを、得なかったのだ。

## 遭遇

放課後。

帰りのホームルームが終わった後、部活に入っている者は、部活開始に遅れまいと教室を飛び出し、掃除当番の者は皆が教室から出て行くのを待っている。

そんな中、部活に所属しておらず、且つ掃除当番でもない僕こと八木智也はいつものように、掃除当番の無言のプレッシャーを一身に、と言うほどでもないけど、それなりに受けながら、下校の準備をしていた。

「智也という名の友や。一緒に帰ろうぜー」

聞こえてきたくだらない駄洒落と、それを僕の耳届けた何とも言えない感じに中性的な声。

耳を擦るということを突き詰めれば、何となくはこんな感じになるんじゃないかなあ、と思える声。

一文に内包された、適度な矛盾は気にしません。

暫し、その内容ではなく声の残り香を堪能した後、顔を上げると、女性陣の母性本能を噴出させてしまいそうな雰囲気を持ち合わせた笑顔を僕に向ける、一人のクラスメイトの姿があった。

何とも中性的。

何とも女性寄り。

髪はショートカットながらも、風が吹けば、些細な抵抗もなく靡くような柔らかさを視覚的に伝えてくる。

色白の顔の上で、くりくりと大きな瞳が実に楽しそうに揺れ、妖艶さと快活さを半分ずつ携えたような赤い唇は弧の形に歪められている。

実に中性的。

実に女性寄り。

そんな外見と声の特徴を持つ友人である、男の子である如月咲月

に向かって先ほどのお返しと言わんばかりに、嫌味たっぷりに言葉を返す。

「咲月ちゃん。今日はメイちゃんのお守りはいいのかい？」

「んだよー、そんなに今のギャグが気に食わなかったのか？」

中性的という概念で造り上げられていそうな外見、声とは裏腹に、意外というよりも、残念な感じに男らしい口調の咲月。

僕はこの口調さえ女の子らしくしてしまえば、完全に女の子になれると思っているのだが、もとい、そうして欲しいと望んでいるのだが、咲月はどうにも自分自身の女の子らしさが気に食わないらしく、せめて口調だけとは、自分自身の外見に反抗期まっしぐらであった。

本当に残念でならない。僕の夜のお供には……自粛。

「気に食わないも何も、そのギャグ、三年近く言ってるだろ？もうマンネリだよマンネリ。僕とお前の仲もマンネリだよ」

「酷い！私との関係は遊びだったって言うの？」

「外見乱用反対。あと、さっき僕がしたナレーションを早速破ってくれるな」

口を尖らせる僕を尻目に、咲月は笑う。くつくつと笑う。右手の指先を、欲情を駆り立てるように唇に浅く当て、笑う。

全くもって、女の子だ。

どう見ても女の子だ。

だって、ドキドキが止まらないもん。笑いながら、目を細めながら僕を見てくる咲月にドキドキが止まらないもん。

これが初恋か？人間歴十七年歴にして、ようやくホモサピエンスとの初恋か？

「智也」

「ん？」

「そんなに私の処女が欲しいの？」

扇情的な目で見つめてくる美少女。

「欲しい」

そして、僕、即答。

貰えるものは、拒みません。

「変態」

「何とでも言え！それくらいの言葉では、僕の愛情は揺るがないからな！」

「あ、熱い……」

暫しの沈黙。

「じゃあ、帰るとするかー」

「ういっ」

いつも通り、一通りの夫婦漫才的なものを披露した後、僕と咲月は教室を出た。

まあ、所謂あれだ、クラスメイトも期待してるからさ、一日一回はやらないとね。

うん。

冷たくはないさ。決してクラスメイトの視線は冷たくはないさ。

せいぜい、アイスノンで冷やしたくらいの冷たさだ。

ははーっ。

たまーに、そういったものに免疫のない人は、液体窒素に漬け込んだような視線を投げてくる時もあるけどさ。ぱりっぱり。

たまーにね。

たまーにさ。

でもまあ、概ね二人の掛け合いは好評だ。

好評のはずだ。

たぶん。

というわけで、二人で歩く帰り道。

校門を出た所で、咲月が本日、下校時におけるメインの話題を振ってくる。

「にしてもさあ、やっぱりあんな風に事務的な口調で伝えるのはどうかと思うわけよ」

「ん？ああ、今日の朝の話？」

「そうそう」

降水確率百パーセントだったにも関わらず、その役割を果たすことのできなかったビニール傘を、くるくるくるぐるぐるぐりと回しながら、咲月は眉間に皺を寄せ、苛立たしげに左手の爪をかちかちと衝突させあっている。

そして、そのまま咲月産・怪人イライランの原料である出来事を吐き出す。

「おかしくない？ 人一人死んでるんだぜ？ それをあんな、今日の給食はコッペパンです、的なテンションで言いやがって」

友人の口から零れてくるのは、今朝のホームルームで大田の死を伝えた際の担任についての文句。いや、口調的には愚痴に近いかもしれない。

ぶつぶつというよりも、ぷつぶつという擬音語がジャストフィットしそうな口調である。

「他のクラスがどうかは知らないけどさ、教え子が死んであれだけ冷静な奴はもう人間として破綻してる。絶対破綻してる。そんな奴が担任してるクラスも破綻してる。もういつそのこと、学校自体が破綻してる」

「僕らの人生計画まで否定してどうすんだよ」  
軽く突っ込む。

「まあ、そうだけどー」

「それに、もう世の中そんな空気だったのは咲月もわかってるだろう？ いい加減、受け入れないと、おかしい目で見られるぞ」

そして、軽く忠告。警告。

何も、咲月が間違ってるとは思わない。むしろ正しいと思う。人の死を事務的に扱うのは、葬儀会社の社員だけで十分だ。

だけど、そんな世の中だったのは数年前までの話。

今は、違う。

影による死を真剣に受け止める方がどうかしているのだ。受け止めてしまえば、どうにかなくなってしまふのだ。

自然の摂理でも何でもいい。

そういうものだと受けて止めないと、まともに生きてなんかいけないのだ。

それほど、影による殺人は身近なものとなっていた。

場所、時間関係なく、現れる影は、今まさにこうして下校している最中に現れても、何もおかしくはない。

つまり、言い換えてみれば、僕らはいつ死んでもおかしくない状況に常に晒されているということ。

勿論それ無しにしても、人生はいつ終わっても、終わりを迎えてもおかしくないものだということは重々承知している。しかし、この場合の死は、あまりにもその確立が高すぎる。

本当に文字通り、いつ死んでもおかしくない。

それが、今を生きる僕らにとっての現実だった。

「お前がそんな事言っているのか？」

少し、いや、かなり苛立たしげに僕を睨みつけてくる咲月。なんともまあ、下校時の和やかな雰囲気とは不釣り合いな目をなさる。

夕陽の柔らかさが、カシミア並みに感じてきたぜ。

その目つきの意味を理解しきっている僕は、一旦、ふうと深い溜め息をつき、言葉を返す。

「むしろ、そう思ってる方がまだましなんだよ。僕としては」

見上げた空は、心の中の不確かな何かを揺さ振るように、赤く、赤く、染まっていた。

僕の両親は、影に殺された。

突然に。

唐突に。

影による殺人に人々が諦めを持つか持たないかの、ちょうど過渡期。

僕の両親は殺された。

まだ中学に入りたての僕にとっては、両親の死と言う事実は受け

入れ難いもので、暫らく引きこもってしまったのを覚えている。いや、正確にはその当時の事はあまり覚えていないんだけど。

映像としては多少覚えてはいるのだが、受けたショックが大きすぎたせいか、当時、僕が何を考え、何を思っていたのかは全く思い出せない。

思い返す光景は文字通り光景であり、何のナレーションも入ることなく、僕の脳内でジージーという機械音と共に流れるだけ。

特に思い出したいとも思わない。僕はどちらかと言えばポジティブ、将来的な生産性を大事に生きている人間なんだ。

嫌な事を無理して思い出そうとは思わないさ。

で、その時、僕を支えてくれたのは、今、隣にいる咲月なんだが。だからこそ咲月は、僕の両親が影に殺されたことを知っている咲月だからこそ、殺された事の意味を理解している咲月だからこそ、今朝のような担任の言動に苛立っているのだ。

身内が殺されてもお前はそんな態度を貫けんのかこのカス野郎、と。

そして、それを黙認しているどころか、難なく受け止めている僕に對しても。多少、両者の間に差はあれども。

両親が殺されて四年経つが、僕は未だに、両親の死を仕方ないものとして受け止められるほど大人ではないため、咲月の言うことがわからないでもない。

しかし、それ以上に、両親の死を仕方なくないものとして受け止めることの方が、僕としては非常に難しい。

憎むべき対象がはっきりしていれば、まだその道を選べるかもしれない。

しかし、憎むべき対象は得体のしれない存在。

だからこそ、その矛先を向けることができないでいた。

苦しんだ末の選択、とか、かっこいい事は言わない。

逃げていると言われればそれまで。

でも、まだ真正面から受け止めることができないでいた。

「智也がそういうなら、これ以上は言わないけどさ……」

僕の返答を聞いた咲月は、それでも不服である、と抗議したげに口を尖らせている。しかし、それ以上言ってこないのは、僕の事を氣遣ってのことだろう。

もちろん、これがもつと付き合いの浅い友人なら、そのことにすら触れてこないだろうが、そこは咲月と僕の中だ。これくらいことは特に何の問題もない。

「ま、咲月が僕の事を思ってくれていることは嬉しく思うよ」  
「……………」

素直にそう感じた僕は、それをそのまま、嘘偽りなく、不純物なく、我が心の友に投擲すると、咲月は尖らせていた唇を一転、内側に収納しつつ噛み締め、顔を真っ赤にしながら押し黙ってしまった。やべ、嫁にしたい。

下心全開な僕は、またもやその気持ちを包み隠さず、改良を加えることなく、咲月の耳へと届ける。

「結婚するか」

「死ね」

先ほどのまでの可愛らしい表情はどこへやら。

今度は片眉を吊り上げ、憎らしき全開といった感じの目で僕を睨みつけてきなすった。

表情豊かな事はいいことだ。

僕はそんな君も受け止めるよ？

「気持ち悪い」

「気持ちは罌？」

「積極的な盗罌！」

体を右回りに捻る咲月。

身体的表現も豊かだな。

「って、冗談はここまでにして」

仕切り直しとばかりに、咲月は僕の肩を軽く叩いた。



「そのゲームセンター、入ろうぜ？」

ぐっと、咲月の右手の親指が指すのは、近所では評判というわけではないが、この辺りではそこしかないと、仕方がなく、近辺の学生が集まるゲームセンター。

まあ、こうは言ったが質は悪くない。

ていうか、個人的には、咲月が言う冗談というのがどこまでを意味しているのか非常に気になるころではあるが、そこはあえて気にしないでおう。

「よし、じゃあこの前の決着を着けるか」

「負けた方は明日の昼飯、奢りな」

「おっけー」

というわけで、二人仲良くゲームセンターへ。

☆

二時間後。

ゲームセンター前。

自動ドア越しにも中の機械が発する音が聞こえてきている。気がする。気がするだけかな。

長時間、耳の鼓膜を騒音に曝したせい、若干ながら周囲の音に鈍くなってしまっているみたいだ。

「くそっ。また僕の負けかよ……」

「ふふー。この僕に勝とうと言うのが間違いなのだよ、ちみい」

二人とも「僕」だどっちがどっかわからんな。

僕は「俺」にしとけばよかったか？まあ、いいや。

結果を述べると、僕の完敗。

おかしいな。最近まではお互いに実力は拮抗していたはずなのに。今日は八戦して七敗。ちなみに、やったゲームは格闘ゲーム。

「もしかして、こっそりと特訓してたり？」

「いやいやー。そんなことないよ。たまたま僕の調子が良かっただ

けじゃないかな？それよりも、明日の昼ご飯、ちゃんと奢ってもらうから逃げるなよ？」

実に嬉しそうに、両手を胸の前にセットし飛び跳ねる咲月。

中性的ということに気にはしているものの、それが言葉遣いにしか反映されない、悲しくも可愛い男の子。

それが如月咲月であった。

「わかってる。ま、どうせ咲月の昼飯はパン一個くらいだし。痒くはあっても痛くはねえよ」

そう、外見、声、行動が女の子らしい咲月は、その期待を裏切ることなく食欲も女の子だった。

本当に、あと声だけなんです！

いや、そこはいいとして。冗談抜きに、女の子以上に食が細い。

昼飯は基本パン、もしくははおにぎり一個。胃袋、ピンポン球よりも小さいと言われたら、僕は迷うことなく信じるね。

しかも、食べる仕草も可愛らしい可愛らしい。まるで、どんぐりを齧るリスのように、両手で餌、失敬、おにぎりもしくはパンを持ち、かぶかぶと食べる。

見てるだけで、幸せになれそうな光景に、道行く人も思わず足を止めて見入ってしまうというものだ。

そのことをからかうと、急に片手で持ち出し、無理に二個食べたりののだが、結局は途中で自然と両手持ちになり、さらには、一個半くらい食べた、もとい齧ったところでギブアップして僕に残りを渡してくるのであった。

これは秘密だけど、実は校内に如月咲月ファンクラブ（会員は男女半々）というものが存在しており、そこに残り物売り飛ばせばかなりの収入になる。

だが、そこは咲月の親友。

一回、いや、二回だったっけ？

……………数えられる程しか売り飛ばしてない。

まー、咲月に実害はないんだし、たまにはこういうのもありだと

思います。

「ふん。明日は絶対に二個食ってやるからな」

僕の腕をがしと殴りながら、明日のパン二個食いを宣言する  
咲月。

うん。

明日は臨時収入がありそうな予感。

そんな邪な考えを頭の隅に仕舞いつつ、僕と咲月は再び下校を再開した。

☆

三叉路。

僕の家と咲月の家を引き離す、無情な三叉路。無機質な破壊者。

僕は中二病。ははーっ。

「じゃあ、また明日」

「ういよー。絶対、二個食うからな」

「はいはい」

咲月は捨て台詞を残し、自分の家へと繋がる道へと進んでいった。  
それを見届けた僕は、その道ではない方へと足を進める。

ゲームセンターでかなりの時間を潰したせい、その成果か、辺りは既に薄暗く、街灯もちらほらと点き始めている。

二人で歩いている時は、当然の如く使っていた会話に対する神経も、一人になれば自然と周囲に向けられる。

目線の先に続く、見慣れたアスファルトの道。

道に沿って続く、どれも似た形状をしている家々。

道の端にある程度は等間隔に植えられた街灯。

どこからかはわからないが、聞こえる鼓膜を心地よく揺らす虫の  
鳴き声。

六月という季節を改めて実感させる、この時期特有のほんのりと  
湿った生ぬるい風。

どれもこれもが、いつも通り。

そんな日常の風景に心は特に動くこともなく、家までの距離を詰めて行く。

——失ってみなければ、その大切さがわからない事もある

なんて言葉が世の中には存在している。

全くもって、その通りだと思う。

両親が死ぬまでは当たり前だったもの。

それは、僕のそれまでの人生、全てだった。

両親の死と同時に、僕のそれまでの人生は失われてしまった。

両親も、両親の優しさも、怖さも、愛情も、両親との日常も、全てが当然だった。当たり前だった。

だからこそ、両親の死と共に、痛いほど、苦しいほど、僕はその大切さを噛み締めた。

もう既に無くなってしまった、人生を噛み締めた。と思う。当時の僕も。

「あー、そういや、晩御飯の材料、もう切らしてるんだったな」

少し、感傷的になってしまった気分を払うように、思考を切り替える。

「カレー、くらいないなら作れるだろうけど、この前もカレー食ったばっかだしな」

視線を斜に向けつつ、今日の晩御飯のメニューを頭の中で組み合わせていく。そのまま、遠回りにはなるものの、スーパーのある道へと曲がっていった。

が、その時だった。

「は……………」

悪寒。

走った。

悪意。

感じた。

汗が、噴き出す。

全身からくまなく。

頭皮から。顔から。首筋から。胸部から。腹部から。背中から。両腕から。両の掌から。両の太腿から。両の脛から。両足の甲から。両足の裏から。噴き出した。

どろりと。これまでに経験したことのないような、非現実的なほど、粘性を持った汗が流れ出す。

そして、体の反応に遅れるように、遅ればせながら、心が反応する。

[illegible]

目の前に、何かいる！

埋め尽くす。

満たし尽くす。

いる、という事実。

確認はしていない。

しかし、事実確認は済んだ。

ああ、どうしようもないほど、いる。

それは直感以外の何ものでもなかった。

ただただ、直感がそう告げていた。

「あ、は……は」

不意に漏れる笑い。

そして、ぼたぼたとアスファルトに落ちる大粒の涙。

死ぬ。

死ぬんだ。

僕は死ぬんだ。

きつと視線を上げたら、死ぬんだ。

死という概念が、無遠慮に脳内を徘徊する。

そして、ようやく、精神的には数分。でも、きつと物理的には数

秒。悪寒を感じてから、ここで初めて顔を上げた。

顔を上げた僕。予想外に、上出来に、心内は冷静という名のうつす

いうっすいビニールを被せる事には成功している。

ハロー？ いや、ナイスチューミーチューかな？

ようこそ、僕の目の前へ。

ようこそ、僕の生活圏へ。

影さん。

ようこそ。

くじ運はそんなに良くない方なんだけどな。

二百四十分の一を引き当てちゃうなんてな。

うーん。君は思っていたよりも、流動的な体のラインをしている

んだね。

もつと固定されてると、勝手に予想していたんだけども。

やっぱり、生は違うね。リアルは異なるね。

ん？ ああ、実は僕、君の写真や映像は見たことがあるんだ。ああ、でも誤解しないで欲しい。あくまでも、テレビとかを通しての合法

的な物だからさ。

まるで芸能人に会った気分だよ。凄い胸の高鳴り。怖いくらいに高鳴っているよ。

本当に、怖いくらいに。

「ああああ……」

ごめんね。挨拶できなくて。

ごめんね。五十音順のスタートの言葉しか、貴方にぶつける事ができなくて。それ以上は前に進むことが出来ない。

でも、それは君が魅力的過ぎるからだよ。

本当にもう、眩しいったらありやしない。

初めて見たよ。これほどまでに、華麗に、醜悪に、見事なまでに死を纏ったモノは。

僕にはもつたいない。

けど、どうやら僕にロックオンみたいだね。

いやはや、光栄だ。

「あ……あ……」

まだ駄目だ。やっぱり駄目だ。

あ、しか言えないや。

君が纏う漆黒の死の前では。全てが奪われていく。

思考も。感情も。感覚も。存在感も。

何もかも、奪われていく。

まるで恋だね。

想い人の前では、自分自身の全てが霞み、薄れていく。

人生十七年目にして、初めて最後の恋（擬似）体験というわけだ。ん？もうお別れの挨拶をしなければならぬのかい？

気が早いなあ。でも、君がそうしたいなら、仕方ないよね？

だって、僕には選択肢なんかないんだから。全ては君の思うままに。

アズユーライク。お気に召すままに。

数メートルも僕と距離の離れていない影は、僕を飲み込むために

ゆっくりと近づいてくる。

ああ、本当に。

何と言うか。

これほど、仕方ないことだとは思わなかった。

まさか、君に襲われて死ぬことが、これほどまでに自然に感じてしまうなんて。

これは今日の担任の先生の態度にも改めて敬服せざるを得まい。残せるかな？そのうまを書いた遺言。

もちろんのこと、それは咲月宛に。

あいつ、僕が儚くも死んでしまったという事を、心は無機物以外の何物でも（何者でも）ありません宣言をしてしまい、既に人間をご卒業なさった担任の先生（咲月談・若干の歪曲あり）の口から聞いてしまった暁には、陰湿で残虐をサンドしたような嫌がらせを刊行するに違いない。

それは、こちらとしても死んでも死に切れないし。

ああ、でももう時間一杯一杯？

無理か？

遠慮なしに、君が僕との距離を詰めてきているわけだし。

僕のための天国への階段も、竣工まじかな？

見える、見えるよ。階段の先で両親がカモン！みたいなジェスチャーしてる。

というわけで、そろそろ目でも閉じて走馬灯の上映開始といこうか。

ゆっくりと、しょっぱい液体が溢れかえっている目を閉じかけたその時だった。

ぱっくり？

さっくり？

ざっくり？

あっさり？

それまで、僕の心と体を弄んでいた影が、二つに割れてしまった。



縦に。裂けるチーズみたいに。

裂けるチーズが腐ったような色の君が、まさか同じような裂け方をするなんて。僕の斜め下に行く発想だよ。そして、事実だよ。

先ほどまで、死を纏っていた影は、どうやら自分自身が死に飲み込まれてしまったみたいだ。

僕は呪詛返なんて高等テク、有してないのに。

さてさて、ここでネタ晴らし。

死の恐怖が去った僕には余裕が生まれております。あれだけ流暢に話してはいたけど、実は息がままならないほどの緊張感だったわけ。

空き容量が全くの皆無だった僕の心のハードディスクは、一気に初期化されたみたいだ。

まあ、目じりからは相変わらず水分が滲み出していることを考えると、正常な形でそうなったとは言い難いけど。

ああ、ああ、そうそう、ネタ晴らしの続きをしようか。

裂けるチーズを再現してくれた影がへたりと地面に崩れ落ち、代わりに僕の目に映りこんできたのは、一人の少女。いや、年齢的には女性か？どうにも線引きが難しい。

手には日本刀かな？本物を拝見する機会はほとんどなかったけど、それでも映像での経験だけで、日本刀だと判断できる物を持っている。

煌く刃は妖しい光を放ち――的な。

んんー、彼女が影を切ったと考えた方が、妥当ですね。

それ以外に考えられないし。

そんな彼女は、つまらぬものを切ってしまった、と言いたげな目で、消え行く影を見つめている。

特に、外見的特徴があるわけでもない。手に持つ日本刀以外は。いや、むしろ、日本刀の存在感が大きすぎて、周囲が霞んで見えるだけか。

無理に、無意味にピントを日本刀から外し、自分を助けてくれた

であろう少女本体に視線を這わせる。

髪は黒髪サイドテール。ああ、でもこの暗さだと、本当に黒いかどうかは怪しいとこだな。

目は常に何かを睨んでないとそうはならないだろ、と突っ込みたくなるほどのつり目。しかし、不思議とそこに殺伐とした雰囲気は感じ取れない。まあ、つまりは生来の物なのだろう。

肌の色は、地黒……だと言いたいところだが、これまた周囲の薄暗さに邪魔されて、正確な情報が視神経に伝達されてこない。

色に関する観察は無駄だな。

しかし、どうなんだろう？

と、首より上部の観察を一通り終えた僕は視線を下降させて行っただが、目に映り込んできたのは、ラフという言葉の代名詞、スウェット。

引き締った顔。凛々しいとさえ言える佇まいに、日本刀。なのに、着こなしている服がスウェットって。

ああ、駄目だ。僕もまだ駄目だ。いまいちまともな脳活性できてない。

おそらくは、命の恩人であろう女の子の身なりに駄目出しをするなんて。

そんな僕の人間観察と内部反省を余所に、少女は慣れた手付きで刀を鞘へ誘う。役目を終えた日本刀は、自分の在るべき場所へと帰るのが嬉しいのか、きゅらきゅらと鳴きながら鞘へと入っていく。

最後にカチンと、鏢と鞘のぶつかる音が夕刻の静けさに飲み込まれていった。

安堵？かは分らない。しかし、鞘に日本刀を納めたと同時に、緊張感を多少は巻き込ませたのかもしれない。先ほどまでよりも微かに、少女の全身に纏う空気がその圧を減らしたのが分かった。

それとほぼ同時に、残骸、死体かは何とも判別のし辛い二つに割れた影は、僕が二択問題の答えを導き出す前に、完全に消えてしまった。

それを確認した少女は即座に背を見せびらかしながら、どこかへと消えて行った。

「うーん……僕は助かったって事でいいのかな？」

これが死後の妄想という可能性を否定することなく、僕はとりあえず、体の動くままに、腰を抜かした。

かくかくがくがくと、揺れる下半身と上半身。

つまりは全身に震えを感じながら、それが恐怖というものであると改めて実感しながら、数分間、立つことはかなわなかった。

## ヒーロー搜索

翌日。

本来なら、僕の特に誰の（咲月以外の）感慨に浸けられることのない死が報告されるはずだった朝のホームルームを終え、さらにはそのまま午前中の授業も終わり、現在昼休み。

これまた、本来なら奢ることはないはずだったおにぎりを、咲月に奢っている。

「にひひー。毎度ありー」

咲月は嬉しそうに、売店で買ったおにぎりを二つ両手で持ち、僕の横を歩いている。

「どういたしまして」

うん。生きててよかった。

咲月の横顔を見て、素直にそう感じ入ると同時に、もし僕が死んでいたら、こいつはきっと笑顔でなかったんだろうな、と思ったり。そうになると、僕は咲月スマイルの守護者だったりするわけだ。むふふ。

君の笑顔は僕がディフェンス！ちょっと違うか？

ああ、いや駄目だ。何かもう嬉しくていまいちテンションコントロールできないなあ。

「む？そんなに僕の唇を奪いたいの？」

そんな僕の視線を感知し、顔面下に設置された麗しい唇をうにうにと動かす咲月。

「そんなところ」

「キモス」

「ラモス？バモス？」

「あながちどちらも否定できない！」

咲月はおにぎりを両頬に宛がい、口をムンクの叫び風味に味付けをする。

そして、僕は僕で、生きててよかったという感慨に二回目の入浴。非常に、心地いいです。やべ、涙腺緩みそう。昨日と今日の二つの意味で。

「智也？」

「うん？」

「何かあったのか？ちょっと嬉しそうだけど」

僕のいつもとは違う雰囲気を感じたのか、咲月は純真無垢を原料とした質問を投げかけてきた。

その目も、何か探りを入れるというよりも、そう感じたからそう質問したんだよ的な光を宿している。

「あったと言えばあったような……」

ストリートに昨日の事を言ってもいいんだけど、あえて言葉を濁してみる自分。

まあ、単純に、そんなピュアリアン（ピュアの最上級）状態の咲月を堪能したいが為の行いなんだけども。

そんな僕の思惑通りに、むむー？と小さく唸りながら、優しく眉間に皺を寄せ、真実を模索する我が友。

「待ってよ。待ってよ。何があったか当ててやるから」

再び、おにぎりを両頬に当てる咲月に、思わずキュンキュンし過ぎて抱きしめそうになる衝動を抑えながら、彼の思考展開の収束を待つ。

数秒後。

「わかった！」

周囲を歩く生徒が思わず振り向いてしまうかしまわないかの、境目くらいの声量で自分の思考展開の終了を告げた咲月。

うん。ちょうど半々くらいの生徒がこちらを向いたな。

ただし、皆の視線が小動物万歳な感じの色に染まっていた事は………だんまりの方向で。

「じゃあ、正解をどうぞ、咲月坊ちゃま」

「うむ。では……」

こほんと、咳払いをし

「好きな子のパンツと同じ柄のやつをネットオークションで落とせた……。どう？ 当たっただろ？」

したり顔で僕の顔を覗き込んでくる咲月。いや、うん、何というかさ、こいつの中の僕の基準はどれくらいアレなんだよ。

とりあえずは、その旨を、声帯を震わせて咲月の鼓膜に届けてみるか。

「違う。凄まじく違う。ベクトルが違いすぎて、もうリアクションもままならない。何がお前の口からそんな言葉を吐かせたんだ？」

「む。違ったか？ もしかして、ブラジャー？」

「ちげえよ！ 何かもうベクトルどころか次元違うよ！ お前の中の僕の像はどんなだよ？ 何？ 今までの付き合いから見えてきた僕は下着崇拜者という、犯罪の臭い交じりの人間だったのか？」

いってえ。周囲の目、いってえ。

刺さる刺さる。でも、気にしない。これが生きてるということ。

私は今、生をフィーリン！……いってえ。

「ちょ、周囲の目を少しは気にしろよ？」

頬が引きつっている咲月さん。僕の心筋（心のよくわからない部位の筋）も攣りまくりだよ。

「お前のせいだ！」

「で、正解？」

きつと咲月の人生は、永遠に自分の都合優先道路として整備されていくのだろう。決して応援はしないぞ。

「違う。うん。何ていうか、昨日、お前と別れた後……」

「浮気？」

「お前の思考回路をできることなら、跡形もなく吹き飛ばした後、再構築してあげたいぜ。友達として。うん。じゃなくてな、うん。あれだよ、あれ……」

ああ、駄目だな僕。

今日の今まで、あんまり自分の真正面で昨日の事実を捉えようと

ここに来て、昨日の出来事をそれなりに真面目に思い返してみると、涙腺どころか、全身の様々な箇所が弛緩しそうな勢いだ。

やっぱりあれだよ。その時は死をリレーのバトンの如く、流れるままに、自然に受け入れることできたけどさ、時間経つともう無理。

恐怖その他エトセトラ、始めました。始めさせられました。一日限定ですので、どうぞお越してください。

アレに殺されたんだよなあ。両親。やっぱ死ぬ時も僕と同じような気持ちになったのかな？

「そういや、影は仇……か。ははー。仇を前に何もできなかったなんて、三途の川を渡る際は、自分で泳げこの野郎とか言われても文句は言えないね。」

「智也？智也？」

思考が徐々に歪曲し始めてきたところで、咲月が心配でコーティングした声を用いて、僕の名を連呼してきた。

「そっかそっか。そんなことか。急に押し黙っちゃったから何事か  
と思ったじゃん」

[illegible]

うろたえてるな。その声につられて周囲の生徒もうろたえてる。

廊下全体に広がる無駄な一体感。

「うえええ。ってまじで？まじか？本当のですか？てか、じゃあ、何で生きてんの？死ねよ。そこは死ねよ。そんで今日のホームルームで担任がまた無機的にそのことを告げて僕に殴られて悶絶して僕は葬式で泣きながらに思い出を語る可哀相な親友的なポジションを確立してその哀愁漂う僕に釣られて女の子がどんどん寄って来る青春万歳！」

「何の話だよ！まずは、僕が生き延びている事を喜ぶべきじゃないか？」

訳の分からない青春理論を練成してしまった咲月は、ぜはあぜはあと息を切らしている。

無駄に肺を酷使した報いを絶賛体感中だ。所謂、等価交換。そのまま、鎧の体になっちまえ。

「だだだ、だって、影に襲われたのに生きてるって、それは智也の夢の中の出来事じゃないのか？明晰夢みたいな感じで現実と夢の境が有耶無耶ハチャメチャになってるとか？」

「それはねえよ。だって、襲われたのって、咲月と別れて直ぐだったし」

「昨日は智也と下校してねえぞ？」

「いらん。その嘘はいらねえよ。何だよ、その嘘。僕の言うこと、そんなに信じたくない？」

「昨日影に襲われたのは僕で、そして、生き残ったヒーローは僕一人で十分だ」

「どんなシンクロシティだよ！」

台詞後、静寂が押し寄せる。結局、一度咲月に向けられたってえ視線は、僕に収束し、その後再び霧散し、事態は終息した。

日常的な、恒常的な、無味無臭に歩く生徒達で埋め尽くされる昼休みの廊下の光景が蘇る。

「いや、生き残れたのにはちゃんとした理由があんだよ」

多少、疲れ気味のトーンを乗せて僕は続ける。昼飯食ってないか



ら、体内に蓄積されたカロリーは減る一方だ。

「聞いてやろう」

「うん。実はな、助けられたんだ。女の子に」

「え？夢落ち？その後、助けてくれた女の子といちゃいちゃくちゅ……」

「やめい」

どうしてだ？どうしてなんだ？どうして、お前は真面目に僕の話  
を聞いてくれないんだよ？

いや、それはまだいい。何で女の子らしい言葉遣いをしてくれないんだよ。このままじゃ、死んでも死に切れない。……って、僕も僕か。

「だから、ふざけずに聞いてくれ」

はぁ、と深い溜め息を一つ。

昼休みも限られてるんだし、いい加減、話を先に進めたい。さつきから同じような方向性を持った曲がり方ばかりしている気がする。まあ、僕も僕で悪いんだけど。

「うー、わかったよ」

大事にしていた玩具を取り上げられた子供のように、目じりを下げ、おにぎり同士を軽くごつつんこさせる咲月。

「で、何がどうだってんだ？」

「うん。さっきも言ったとおり、あの三叉路で別れた後、スーパーに行こうと角を曲がったところで影に遭遇したわけんだけど、それはもう、容赦なく死を意識したわけ」

教室に進路を定め、再び歩きながら話を進める。咲月は、おにぎりを胃袋に詰め込み、栄養として自分の体内を駆け巡らせる作業に勤しみ始めている。昆布と鮭。どうやら、昆布の方から搾取していく方向性らしい。

「ほむほむ。んでんで？」

嬉しそうに、米のスクラムを頬張りながら、気のない合いの手。  
一通り騒いだ彼の精神は、既に還暦並みの落ち着きを獲得してしま

ったようだ。

そんな友の態度には特に言及することなく、話を進める。

「人間、死を覚悟すると、頭の回転が凄まじく速くなんだよな。あれが達人感覚なのかって、今思うとちょっと感動したりもするわけだけど」

「ふんふん」

おにぎりを半分ほど胃袋に仕入れた咲月は、少しばかり食のペー  
スを落とし始めた。胃袋が腸への転送をうまくできないでいるよう  
だ。顔からも余裕が失われてきている。

「まあ、それはいいとして……」

思い浮かぶ少女の顔、体、その形。日本刀。それらを脳内で映像  
として再生する。

「影が僕との距離を詰めてきて、あー死んだなあって思った瞬間に、  
急に影が真っ二つに、何ていうか、ぱかっとな縦に分かれたんだ」

「分かれた？」

「裂けたって言ったほうが正確かな。そう。で、二つに裂けた影の  
代わりに現れたのが、一人の女の子。手には日本刀持ってたし、た  
ぶん、その子が僕を助けてくれたのになって。まあ、その後直ぐに  
どこかに行っちゃったから、名前も聞けなかったけど」

走り行く後姿にテロップを入れるなら、『少女はまだ見ぬ明日に  
向かって走り出した』くらいだろう。テンプレート感が逆に安心感  
すら与えてくる。

「ほうほう」

おにぎりを食べることを止めた咲月は、皺にならない程度に両眉  
を顔の中心に寄せている。左手では手付かずの鮭のライスボールが  
早く食べてと言わんばかりに動いている。

まあ、咲月がその小さな手でにぎにぎしているだけなのだが。

「うーむー」

唸る咲月。

「どした？」

疑問符な僕。

「あ、うん。噂は本当だったんだなあと思って」  
「噂？」

咲月は脳内に保管されている記憶に刺激を与えて起動させる為かは知らないが、眉間に人差し指を当て、ぐりぐりと皮膚を苛め始めた。

「そう。噂。最近、影に遭遇した人が誰かに助けられたとか、そんな感じの噂が流れてたんだ。勿論、智也とは別口で」

「まじか？」

「まじだ」

うーん。それは初耳だな。僕以外にもいたわけか。見事にヘルプされた奴が。探し出して、サバイブ同盟でも作ろうかな。……………ん？あれ？でも……………

「それなら、もっと噂広まってもよくないか？あの影を倒してくれる奴がいるかもしれないって、相当のビッグニュースだと思うんだけど」

僕の耳に自然とゴールインしてもおかしくない話だ。てか、普通に、その真偽を確かめる為の特番とか組まれてもおかしくないだろうとしたマスメディア。

昨日の段階でそれを情報として脳内の保管庫に入れていれば、あんなにも死だけにしがみつく事もなかっただろうに。

まあ、過ぎた今としては、どうでもいいことではあるけど。

「問題とまではいかないけど、障害はそこだよ」

所詮は噂だしね——と、咲月はぼやきながら、農家の方の血と汗の結晶を無造作に空中へと放り投げた。天井に向かって。どうやらもう自身の体内へ放り込むつもりはないようだ。

「結局はさ、誰もそんな事信じられない、ていうか、信じようともしてないってこと。尾ひれが付くどころか、噂が噂自身に飲み込まれて終了って感じ」

「うん？」

「うん。だからさ、警察でもお手上げ万歳三唱な相手なのに、そんな一個人かどうかまでは分からないけど、少なくとも、そんな都合主義的な感じで救世主が現れるのなんて、今さら信じられるかってわけ」

「ああー、なるほどねー」

確かに、咲月の言うとおりだな。五年近くも、人類はその存在に對して何もできなかったんだ。そういった類の噂があまりにも現実から乖離し過ぎていて、常世の夢物語過ぎるってわけか。

ったく。つくづく異常だ。噂すら流れないなんて。

希望は抱くな、抱かせるな。

夢を見るな。見させるな。

信じる者は報われない。信じさせる者も報われない。

自然のままに、あるがままに、受け入れる。受け入れる。現実を。

死を。影を。存在を。

否定するな。否定するだけ、壊れるだけ。壊れるのは、影に包み込まれた時だけでいい。

死ぬ時だけでいい。だから、夢を信じて苦しむな。

ってことか。

どこまで、影は僕らの日常に根を張るつもりなんだよ。

気持ち悪い。本当に、気持ち悪い。

「だから、僕も智也の話を聞くまでは、完全に無視してたんだけど、もし、本当に智也が見たのが噂のスーパーヒーローだとしたら、これはこれは、もう大ニュースだよ。ううん、事件と言ってもいい」

若干、興奮気味に咲月は頬を吊り上げる。少しばかり、耳も紅潮している。

「智也」

「うん？」

「探そう」

「へ？探そうって、何を？」

「ヒーローだよ、ヒーロー」

上ずった声。

上気した顔。

小刻みに震える手足。

咲月は、それはもう、新しい玩具を買って貰えた子供のような喜びを全身から放っていた。

☆

翌日。

放課後。

僕と咲月は学校備え付けの図書館に来ていた。

僕らの通う高校は、二本立てとなっている。つまりは、校舎二つ。それぞれ五階建て。どちらかと言えば都心に近い位置にあるので、どうしても空に向かって空間を利用する

という、バベル的な構造になってしまふのは仕方のないところ。

校門側に立地する校舎の内部は、各クラス用の教室と購買部、食堂など。

河川側に立地する校舎の内部は、職員室や各特別教室など。

一応渡り廊下は備え付けられているものの、一、三、五階にしかないため、少しばかり、行き来のし辛さはある。

だからといって、特に構造上に大きな不満があるわけもなく、二階の端にある家庭科室に行く時に、一握りの苛立ちを感じるくらいのものだ。ん？これは不満か。んー、まあ、いいや。

で、肝心の図書室はというと、河川側の五階、一番隅にひっそりと存在している。渡り廊下がある階なのだから、家庭科室よりも利便性は高いのではないかと、新入生などは勘違いを引き起こしやすい。しかし、それも中学生要素の抜け始める五月の末日辺りまで。

あ、いや、そこは千差万別、人それぞれなので、やっぱり、五月下旬前後と訂正を入れさせて頂こう。

そう、で、暫らく校内での生活を送ってみると、河川側校舎の五階

というものはほとんど使用されない事に気づいていくのである。実は、五階の教室群を立派に占拠しているのは図書館くらいで、残りの全ての教室は完全なるゴースタウンと化している。

なぜかは分からないが、机も椅子も置かれていない、ただ空気だけが皆勤賞の教室ばかりなのである。

うーん、学校の七不思議だ。

そうやって来ると、五階にはそれなりに陰鬱、閑散、といった雰囲気漂うわけで、唯一正常に機能を果たしている図書館ですら、忌避の対象となってしまうのが現状だ。

もともと、取って付けたような図書館であるため、品揃えがどうにも悪いと言うのも、その一因ではあるみたいなんだけど。自業自得。

そういった訳で、僕と咲月は人口密度が学校一低く、大きいテーブルのある図書館、もとい、本置き場をミーティング場所として選択したわけだ。

「じゃあ、これより、第一回ヒーロー搜索会議を始めます」

咲月の高らかな宣言とともに、よく分からない二人だけの会議がスタートした。一応、場違いな声に、はらはらしながら周囲に視線をくべると、生徒は一人も居らず、窓から差し込む夕陽だけが静かな観覧客として、我が物顔で空間の半分を占拠しているのみ。

なんともまあ、干渉な客なこと。

図書館を管理しているはずのおばさんも、完全に見て見ぬ振りを決め込んでいるのか、視線を手持ちの週刊誌から上げようともしない。

まあ、やり易いにこしたことはない、か。

「で、一体何をするんだ？」

「むむー、ちゃんと話し聞いてなかったのか？」

広用紙を遠慮なくテーブルに広げながら、咲月はぷちっと僕への愚痴を零す。蚊くらいなら潰せそうだな。

「いや、まあ、聞いてはいたけどさ、どうやってそれを実行すんの

かなって」

「それを今から話し合うんだろ？」

まあ、正当か。にしても、どうすんだか。噂の彼女、僕が見た彼女を探したりなんかして。

「言っただろ。僕は影による死を正当化してないって」

僕の気持ちを見事に自由落下により地面と衝突する前に、掬ったようだ。咲月からのアンサー。見つけた後、それをどうすんのかってことは今は言うまい。それは後で、そうだな、このミーティングの後でも……いいかな。

「見つける算段は？」

外見は僕が記憶してるから、見れば分かるだろうけど、まず見つけれなくては意味がない。

「ふふー。まずはこれを見てくれ」

咲月がこれ以上自信は詰め込めません、と言わんばかりの顔をしながら広げた用紙を指差した。

あっち向いてほい、遅く動いたのに負けました、と言った感じで視線を投げた僕の目に映りこんできたのは、一枚の地図。

広用紙じゃなかったか。しかも、これは町内全域をカバーするほどの広さだな。

「んん？何だこの点？」

よくよく見ると、地図上には赤い点がところどころに打っており、僕は何気なく指先で触れる。うん。特に変わった感触はなし。当たり前か。

「それはねえ、影が出現したポイントだよ」

「うえい？」

反射的に指を引き離れた。ついでに、足も一本、後ろの床へ献上。ははー。控え居ろう。影様のおなーりーであるぞー。ああ、がくぶるがくぶる。

どうやら、未だに心の何処かに、影の存在が粘着性豊かに張り付いているみたいだ。そのまま、寄生虫へと変貌を遂げないことを祈る

ばかりだな。

「ていうか、何処でこんなの調べたんだ？」

「ふふー。僕の情報網を舐めてもらっちゃ困るなー」

と、咲月。

お前の情報網の凄さも、ここに来て初耳だ。

「こんな事もろうかと、ここ一年ちよつとの間、影の出没情報とか調べてたんだ」

「咲月、お前……」

あああ、まずい。涙腺が勝手に生産ラインを稼動しやがった。早くストライキ起こさないと。ああ、もう。咲月のアホ。なんて事してんだよ。いや、もう、本当に……………。

「高校生という青春時代を、そんな物に全て捧げるなんて。言ってくれば僕も少しは手伝いできたのに」

何たる悲劇。

何たる衝撃。

妖精から、人間に憧れてトランスフォームしちゃいました、と言われても全く違和感のない麗しの咲月が、一人で、たった一人で、そんな事に時間を潰していたなんて。

「ああ、本当にごめんよ。もっと早く気づいていれば……」

もう後悔しかできない。神よ。僕の命を半分あげてもいい。元より、一度失ったはずの命。その代わり、咲月の一年間を取り戻してはくれないだろうか？

慈悲を、慈悲を咲月に。

僕の体は自然と膝を付き、胸の前で両の指を交差させた。

「ちよい待て。何で僕を根暗な残念っ子に仕立て上げてんだ？」

頬をひくつかせる咲月は、同時に、祈りを捧げる僕の立てた片膝に足を遠慮なしに乗せてきた。

どうしてでしょう。興奮してきましたね。

「だって、この一年間。それしかしてなかったんだろ？」

「勝手に決め付けるな！こればっかしてたわけないだろ。どんだけ



僕を貶めるつもり？第一、驚くことはそこじゃないだろ」

踏まれる。踏まれる。踏み躪られる。右膝から太股にかけて。ついでに、心も。個人的にはもう少し内股側を。心の柔らかい部分を。踏んで欲しい。

死線を乗り越えた僕は、新しい境地に乗り出してしまいそうです。「とにかく、だ。僕の事をそんな残念な奴にしないでくれ。これはあくまでも趣味の範囲内のことだし」

全く、と不服氣に口を尖らせた咲月。さて、冗談はここまでにして、無視を決め込んでいたはずの、まあ、こっちがそう勝手に決め込んでいただけなのだけど、図書館のおぼちゃんの視線が死線に変わり始めてきたので、話を先に進める事にしよう。

ギアをDに入れ、サイドブレーキを下ろし、前後左右確認。それでは、出発。全くもって、無駄な描写だ。

「まあ、それは分かった。ふざけて申し訳ない。んで、つまりは、この点が多く出現してる所に、影が出る確率が高いってわけか」

「そういうこと」

「でもなあ……」

と、僕。

「何か不満？もしくは、質問？」

ろ、咲月。杉——くんと——路くんろ。

「昨日の昼休みは、噂なんて信じてなかったとか言ってたのに、こんな作ってるなんて……ふふおい！」

右頬に伝わる衝撃。台詞途中で視界の端の咲月が、左手を振り上げるのを確認できていたので、まあ、そのまま僕の頬に左手を突撃させたのだろう。即断実行。素晴らしい。

「痛い……」

「いらんことに気づくからだ」

少しばかり揺れる視界の中で、そのまま蒸発してしまいそうなほど、咲月の顔は赤くなっている。

ふう。僕もなかなかどうして、真面目に話を進める事ができない

かな。

「すまんすまん。とりあえず、言っておきたくて」

「言わなくよかったのに」

どうやら蒸発は免れたらしい咲月は、口からぷちっと不満を生み出した。

「まあ、それはそれとして……」

再び、地図に目線を貼り付ける。今度こそは真剣に。

「影が現れた場所、重点的に現れた場所がこうなのは分かるけどさ、もしかして、ここから何ポイントかピックアップして、昔の刑事ドラマよろしくな感じに張り込みでもするつもりか？」

「うーん、具体的には考えてなかったけど、そうした方が一番効率いいかなって思ってた」

「ふーん」

三度、視線を地図へ。えっと、一昨日僕が襲われた所はっと。いまいち見慣れない地図と格闘し、目的の場所を探す。

「お、僕が襲われたのここか。……ん？」

何だか、何か引つかかるような。襲われた地点に人差し指を置き、地図上の赤いプロットを観察する。規則性とかはなさそうだけど、偶々かは分からないが、プロットが集中している場所もあるな。

まあ、こちらの予測のみで判断するのはどうにも憚られるところだけど。って、……。

「ああ、そうか」

「どうした？」

「あ、いやな、一昨日僕が襲われた所はここなんだけど」

咲月にも分かり易いように、少しだけ体を横にずらす。

「ふむふむ」

「で、影が繰り返し現れたのはここ」

赤い斑点が多数落ちている場所を、空いている指で押さえる。ちようど、僕が襲われた地点とは地図の中心を軸にしたら、線対称の位置。

「それでそれで？」

「うん。確かに、影が多く現れた場所はこの地図で分かるけど、それがイコールでヒーローの現れる確立には繋がらないんじゃないかな、と。ほら、僕が助けられたのはここだろ？で、多く襲われてるのはここ。噂にもならないくらいの救出率なら、それこそ、偶然的な要素が強いんじゃないか？」

この地図のプロットされた地点に攻め込む場合、ヒーローに会う確立よりも、ホームルームで僕らの自然死を事務連絡される確立の方が高そう。死地にわざわざ赴くようなものだし。

「……」

口を真一文字に結び、じとっと、自己作成の地図とそのプロット、そして、そこに置かれた僕の指を咲月は見つめる。

そして、暫らくの沈黙の後、

「でもでも、そうしないとそうしないと、駄目だもん。駄目、だもん」

と、何とも弱弱しいトーンで言葉を吐き出した。しかも、普段とは百八十度方向の違う、堪らなく子供染みた言葉使いで。

「おわっ。咲月？」

ぽたぽたと、大粒の涙が咲月の目から零れ落ち、広用紙の上に小さな水溜りを形成し始めてしまった。

下唇を噛み締め、ぷるぷると、とある愛玩動物のように体を震わせる。

「だ、あ、すまんすまん。別にこれがいらないってわけじゃないんだ。ただ、一昨日助けられた場所が、ちょっと赤いプロットとは離れてたから、何となくそう思っただけで………」

「だって、だって、これ作るのに、僕、頑張ったのに、なのに、いらないなんて。そんなのそんなの酷い、酷いよ」

僕の弁明は咲月の鼓膜まで宅配されないみたいだ。受け取り拒否か？

にしても、咲月の涙は卑怯だ。これが普通の男友達ならうんとも

すんとも思わないのに、見た目が女の子よりの彼だと話は別。

冗談抜きで、女の子を泣かしてしまったような錯覚に陥ってしまう。

で、目下そんな精神状態へと追い込まれてしまった僕。

「ごめんごめんて。ほら、な、誰も使わないとは言っていないだろう？ただ、そういう可能性もあるって話だけでさ。な？な？」

ああ、もう、本当にいつもこうだ。彼、咲月は自分の努力が報われないと、ぐずり出す。所謂、退行ってやつか。さすがに昔に比べて、人前でぐずり出すということはほとんどなくなったけど、どうにも二人の時には歯止めが効かないみたいだ。

いや、効かせるつもりがないのか。まあ、それはよく分からないけども。

「ぐずっ。ぐずっ。頑張ったのに。頑張ったのにい」

頼む。泣き止んでくれ。ちょっと、おぼちゃんも身を乗り出し始めてるよ。無駄に干渉されて、物語、ややこしくなのは嫌ですよ。「使おう。もう擦り切れてどうにもならないくらいに使おう。この地図。せっかく、咲月が一生懸命作ったんだし、使わないわけないだろう？」

咲月を宥める為、極細ポッキーを折るかのごとく容易く、自分の意見を粉碎しました。いや、もともと、何となく言っただけだし、全然痛手じゃないけど。咲月の涙腺に通行止めの看板立てる方が余程価値のあることだ。

「ほ、本当に？」

咲月は、少し赤みを帯び始めている目の下を擦りながら、僕のをまっすぐに見つめてきた。ぐふう。凄まじい罪悪感。

女子泣かしたついでに、小動物苛めました的な罪悪感も来てる。

これが、伝え聞く二重の極みというやつか。

「ああ、本当だとも。だから、もう泣くのは止めよう？高校生が泣くなんてみっともないしな」

「うん。うん」

納得してくれたのか。こくこくと小さく頭を縦に振る咲月。よかった。身を乗り出し始めていたおぼちゃんも再び週刊誌に首っ丈。「じゃあ、早速、明日からの予定を立てよう」先ほどまでの泣き顔は何処へやら。咲月は、まるで、向日葵が咲いたような笑顔を発掘なさった。ったく。敵わないねえ。

☆

というわけで、翌日。

どういうわけか、翌日。

いや、もう愚痴は零すまい。

というわけで、放課後。

僕と咲月は早速、地図に赤い点が落とされている地点へと、実際に赴いている。

「むふふー。何やかんやで、智也は僕の事好きだなあ」

僕の隣に位置する咲月は、大変ご機嫌麗しゅう、陽気なステップを踏みながら歩いている。

「まあ、これ以上泣かれても困るしな」

ふう、と溜め息。昨日の事を思い出し、何となく、たそがれてみたり。彼女と喧嘩した日の翌日はこんな気持ちなのかなあ、と妄想してみたり。

「またまたー。でもね、私があんな一面を見せるのは、貴方の前だけなんだから」

「……はい」

今日はまた一段と声色を使いますな。罪滅ぼしか？昨日の事に対する罪滅ぼしか？たくもう、許す！鼻血出るぞ、この野郎。

むふふー、とさらに上機嫌が上上機嫌へとステップアップした咲月の腕が、僕の腕に絡みついていた。

「ちょ、おい、さすがにそれはまずいって。制服だとお前が男だっ

てばれるだろ？」

私服姿はフイメール。

微かにボーイッシュなフイメール。

「大丈夫だよー。周りの人達は、全然違和感なく僕らのこと見てるし」

周囲を一望。微笑ましいなあ、おい。周囲の方々の笑顔がこれみよがしに、微笑ましいなあ感全開。

服装なんて、ただの飾りに過ぎないというのか。大事なのは、本質というわけか。いや、本質も見失ってるだろ。

「それに、ここは学校からも外れてるし、知り合いに見られる事もないよ」

「そういう問題じゃなくてな……」

「イヤ？ 智也は、ヤなの？」

「嫌じゃありません」

僕は、僕の将来が心配でなりません！

ああ、もう、本当に咲月が女の子ならどんなに良かったか。僕の理性を止めてんのは、咲月の性別だけだよ。まじで。

だいたい、何で咲月は僕の腕に絡み付いてんだよ？ 別に、嫌じゃないからいいけどさ。

あああああ、もうもうもう、まじで心配だよ！

「ところで、聞いたかった事があるんだけど？」

とりあえず、僕の将来的な不安は置いといて、今現在の事に重点を置くことにした。

「何？ 私は貴方以外には見えてないわよ。貴方しか見えない。貴方だけ貴方だけ。世界は貴方。貴方は世界」

「ヤンデレ！ ……………——じゃなくてな、ヒーロー探すのはいけど、その後どうすんだ？」

見つけた後、写真でも撮って、印籠代わりにするわけでもないだろうに。無尽蔵生産体制の影にそれが通用するとは思えないしな。

「そのことなんだけど」

と、咲月は至近距離にある僕の顔を見上げる。

「たぶん、ヒーローは何かしらのヒントを持っているはず、と僕は思うわけだよ」

「ヒント？」

「そう。影を倒すためのヒント。智也が見たヒーローは、日本刀で影をやっつけたんだろ？」

「ん、ああ、そうだな」

「おかしいとは思わなかった？」

なぜか僕の頬にぐりぐりと人差し指を押し付けてくる咲月。いくら掘っても石油なんてでないぞ。いや、記憶を穿り返そうとでもしているのか。人様の記憶だけど。

「いや、特には」

「よく思い出してみて。影に、物理攻撃が効いたなんて話、聞いたことあったかしら？」

何故か女性口調の咲月に促されるようにしてフラッシュバックしてくるのは、影に関する報道。中でも、影に攻撃を仕掛けたという内容をセレクトして。

「そういえば、ないな」

結論。一回も聞いた事がない。警察官が拳銃を使用したとか、襲われた人が苦し紛れに、殴りかかった、等と言った目撃証言があるにも関わらず、撃退したという情報は一度も耳に飛び込んでこない。

まあ、報道がされなくなったせいもあるかもしれないが、どちらにせよ、ないものはない。

あったとしたら、今頃、僕らにも拳銃所持が認められている可能性も高いし。そうじゃない所を考えると、駄目だったのだろう。

「だろー？ そうなると、ヒーローは何かしらの対策を心得ている、と考えた方が妥当なわけだ」

「なるほどな」

咲月の予想に、思わず感心してしまった。

「にひひー。まいったかこの野郎」

うりうりと、僕の頬から出るであろう、何かしらの資源の採掘に人差し指使って勤しむ咲月。

そんな彼を尻目に、しかしなあ、と僕は思考をエゴイスティックの滑走路に、静かに着陸させる。

今までの言動から、咲月的には影を相手に勧善懲悪劇とまではいかないにしても、それなりの事をしたいのだろうということは、ぼんやりながらも読み取ることができる。

影による死を自然死としない、彼らしい態度だとも思うし、それを否定するつもりは毛頭ない。

だからこそ、こうやってヒーロー搜索に協力しているわけだし。

まあ、ここまで具体的な行動に移すまでとは思ってなかったけど。いや、これは僕の責任でもあるか。

完全に、今回の僕のスウェットヒーローとの遭遇が、咲月の心に油を注いだのは言うまでもない。火はもともと点いていたと推測。

一年以上も一人で影の出現場所の情報を収集していたくらいだしな。心に溜まっていた鬱屈は、相当なものだろう。

まあでも、それはそれでいいさ。人にはそれぞれ情熱を傾ける物があった方が、より良い人生を送れるだろうし。

ただ、それで本当に影に遭遇してしまったら、元も子もないのだけれども。その時は、その時か。

お互いにその覚悟ができているかと言われれば、僕の方は怪しいけど、咲月の方は大丈夫だろう。

一度手放しかけて拾った命。だからこそ、僕はその大切さが余計に身に染みて分かっていて、というだけの話。

友達の為なら、そこまで自分の命は惜しくはない。ただし、ここは、友達がイコールで咲月となる分、制限が出で来るわけだが。

いや、そこはいいんだ。それよりも、問題は、圧倒的に僕のヒーロー搜索に挑む姿勢か。



どうにも、拭い切れない。

表面上は咲月に釣られて、何とはなしにこの搜索に参加しているようには装っているものの、心の奥底で湧き上がる、ああ、違うな。滲み出す、影に対する恨み辛みが拭っても、拭っても、じゅくじゅくじゅくと、微かな痛みを伴いながら滲み出してくる。

凝固剤はどこにも見当たらない。

どこにも。

見当たらない。

影を間近で見た瞬間から、止め処なく滲んできては、僕を侵食しようとする。

嫌な感触。自分の中身が復讐で埋め尽くされていく、不快極まりない感覚。

でも、それでも、微かに、気持ちいい。今まで、何年間も抑えていた自分の本能に素直に従属した感情が、滲み出す度に、僕の心にその染み残していく。薄っすらと、残していく。

今はまだ抑えられている。しかし、それも咲月のヒーローに対する予想により、怪しくなってきた。

もし、運よくヒーローに会えて、影を倒す方法を教えてもらえたら。そう考えると、いよいよ、体にまで侵食が始まり出した。

早く、会いたい。あつて、知りたい。知って、殺したい。影を。

殺したい。僕の人生を奪った影を。容赦なく。徹底的に。完膚なきまでに。永遠に。殺し続けたい。

徐々に、その衝動が全身を蝕み始めている。

怖い、というのが正直な感想。

今の自分に対する、素直な感情。

復讐が快楽に変わったら、自分はどうなってしまうのか？

そうになったら、咲月との関係はどうなってしまうのか？

元には戻れなくなるのだろうか？

どこまでも、怖かった。

「ふう」

ついた溜め息にも、滲んでいそうな気がするな。ああ、ああ、重症だ。

「智也？」

「ん？」

「少し、休んで……いく」

頬を染め、控えめに僕の袖を引く咲月が指差しているのは、所謂ラブホテル。

歩いている内に、そういった通りに入り込んでいたらしい。

「入ろうか」

[illegible]

$\vdots$

まだ始まつてもない事を考えるのは止めよう。

その時に考えれば何とかなる、よな。

その日から、地図上の赤いプロットを頼りに、放課後の一時間から二時間ほど、ヒーロー搜索の為の活動が続けられた。

時には、樹海の様な森の中を歩き回り。

時には、人混みの多い商店街を駆け抜け。

時には、咲月を肩車して、堀越しに廃墟の中を確かめたり。

時には、僕がヒーローと勘違いをした、ただのスウェット娘に話をかけてしまい、ナンパと勘違いをされたり。

多少の脚色はご容赦頂きたい。

しかし、噂にもならないほど出現率が低いヒーローが簡単にそう

見つかるわけもなく、僕らの搜索は、ただの健康維持の為のウォーキングとしてしか意味をなしていない状態のまま、二週間が過ぎた。

☆

「うー、見つかんねえよー」

現在地。

五階の図書室。

今日も今日とて閑散日和。

放課後の図書室には相も変わらず、週刊誌と睨めっこをするおばちゃんのみ。

静寂のオンステージ。

そんな中、咲月は静寂の独占を阻止すべくかどうかは知らないが、というか、百二十パーセントそんなつもりはないのだろうけど、以前に地図を広げたテーブルの上でゴロゴロと寝転がっている。

僕はサファリパークに来たつもりで、間近で咲月の行動を観察する。

機会があれば、レポートにでも纏めて、咲月ファンクラブの会合で報告しようかな。

拍手喝采は確実だ。常に咲月と行動をする僕には、それなりの期待がかかっているのも事実だしな。いや、まあ、そこはどうでもいいんだが。

しかし、咲月がこんなにも、無作法極まりない事をしているにも関わらず、おばちゃんは視線すら向けようとしな。

学校内なのに、この図書館と言う空間だけ、教育が完璧に放棄された教育無法地帯となってしまうている。

まあ、特にうまい言い回しでもないけど。

「とーもーやー。お前本当にヒーロー見たのかよー？」

ころんころん。

ころんころん。

右の端に行っては逆回転。

左の端に行っては逆回転。

を繰り返す咲月は、それでも、目を細めながらタイミングよく、僕と視線の交流を図ってくる。

なんともまあ、器用な子なこと。

「それは間違いねえよ」

「うむむー」

特に解決策を求めて僕に質問してきたわけではなく、単なる事実確認。

やはり、二週間も進展がないと、さすがの咲月も気持ちが多少、捻じ曲がってきてしまっているようだ。

一年間、一人で地道に活動してきたのに、何とも早い息切れ。…いや、だからこそ、かな。

内側に無理やり、溜めに溜め込んだ思いが一気に弾けてしまったせいもあるんだろう。暫らくすれば、復活するはず。

五月病みたいな感じだと思ってもらえれば。

ちなみに、僕に関しては、あえて非公開設定で行こうと思う。

「今日はどうする？」

「ううー。どうしよう」

ここでようやく動きを止めた咲月は、テーブルに顎を付き、両手を前方へと伸ばす。あー、ぱっと見ウルトラマンかパーマンだな。

まあ、どうでもいいが。

「止めとくか？ここ最近は毎日歩いてばっかだし、さすがに疲れてきただろ？」

「むむー、確かに疲れてはいるんだけど、もし今日見つかったらと思うと、サボるわけにもなあ」

消極的な物言い。正直、僕も疲れているところだし、一押しすれば、今日の放課後は家に直帰できそう。

「まあ、今日くらいいいじゃねえか。たまには休憩しとかなないと、もし体調崩しでもしたら、元も子もないわけだし」

「だだー、そうだよなあ」

だだーって何だよ？二文字連続できればなんでもありか？

「じじー、そうだよお」

「何その、じじーって。気持ち悪いな」

辛辣な言葉と、冷ややかな目で僕を貶してくる咲月。今日のお勧めは、ピリ辛冷やし中華ですか？

うーむ、どうやら、咲月の中で一定のルールがあるみたいだな。

これもまた、解明してファンクラブで（以下略）。

「じゃあ、今日は休みにするかー」

仰向けになり、咲月は小さく溜め息をつく。そこには、二酸化炭素以外の僕に良くないマイナス成分がいろいろと含まれていそうだったので、触れないように注意を払った。

☆

こんな経緯で、本日は解散となったわけなのだが、どうしてだろうか。僕は一人、町中に繰り出していた。

目的は言わずもがな、ヒーローの搜索。

咲月に黙って、一人での搜索。

「何してんだか。僕は」

思わず漏れる自分への愚痴。

休みたいはずだったのに、体は勝手に動いている。

動いてしまっていた。

「いよいよ、来てるな」

探りを入れるように、慎重に自分の心の中を覗くと、そこには色濃くついた染みが広がっている。

にちにちと。

にちにちと。

広がってしまっている。どうやら既に、染みではなく、微かに液状のものも溜まってしまっているみたいだ。

拭う事に関して、決して怠慢していたわけではないのだが、気がつけばこの有り様。

全くもって、自分の感情が恐ろしい。

「だいたい、一日頑張ったからって、見つかるわけもねえのに……」  
思わず漏れる自分への矛盾。

今回来ているのは、とある商店街。

この二週間、プロットが落としてある地点を中心に搜索網を展開していたので、それに逆らって、全く関係のない所へと足を運んでいる。

まあ、今回の単独行動は咲月に気を使った面も無きにしも非ず、かな。

たぶん、この事を知れば、容赦なく彼は泣き叫ぶだろう。そればかりは、回避したい。

その為の単独行動、と言い訳を試みたり。

全くくだらない。

自分の気持ちに正直になれば、もっと猪突猛進でいけるのだろうけど、そうした場合、失う物が、者が多すぎる。と、思う。たぶんだけど。

というわけで、矛盾した感情その他もろもろを、自分の心を原料にして出来上がったボールの中で掻き混ぜつつ、足をのたりのたりと進めていく。

視界に入り込んで来る人々は、何一つ普通と言う枠組みから逸脱することのない、日常の風景を形成している。

安売りを主張しながら、肉を売りさばく肉屋の店員。

友達と仲良く追いかけてをしながら家路を走る小学生。

夕飯の買出し途中に、立ち話に華を咲かせる主婦達。

そのテンプレートな風景は、おそらく日本各地、どこの商店街にコピーアンドペーストしても、違和感は全くないだろう。逆もまた然り。

とことん、どうでもいいけど。

「あ、今日の夕飯の事、考えてなかった」

どうでもいい思考に引っ張られるように、さらにもうでもいい思考が頭の中で顔を覗かせた。

「いや、どうでもよくはないか」

少しだけ、ヒーロー搜索を頭の隅に追いやり、晩御飯の事に思いを巡らせる。

冷蔵庫にはある程度ストックあるけど、せっかく商店街に来てるわけだし、少し買い足しておくのもいいな。

ストックって言っても、カレーが作れるくらいだし。

明日以降の事も考えると、今買っておいた方が楽か。

「よし。搜索をある程度終えたら、買い物しよう」

特に決意する必要もないほどの事をわざわざ口に出して、決意した僕。

でも、とりあえずはヒーロー搜索を続行。

と、顔を上げた瞬間、視界の端に入り込んできたのは

「え？あれ、は……」

上下スウェット。

腰には日本刀が入っていきそうな横長の布袋。

さらには、歩くたびに揺れるサイドテール。

そして、横からでもはっきりと確認できるつり目。

えええええ、ここで？

このタイミングで？

自分の目を疑いたくなるほど、二週間前に見たことのある少女とそっくりな少女がいた。

うん。ていうか、そのもの。

あまりにも自然に。

あまりにも衝撃なく。

命の恩人は僕の目の前に現れた。

いや、僕が現れたのか。普段は来ない所に来たんだから。

いやいやいや、それは今どうでもいい。

二週間振り位の再会を果たした僕の脳内回路は、多少混乱しているようだ。

そりゃそうだ。

二人がかりでみっちり二週間探しても見つからなかった彼女が、こ  
うも当たり前前に、僕の視界に入ってきたのだから。

今度は、間違いないはず。たぶん、だけど。

ていうか、こんなに日常の風景の中に自然と入り込んでいるなん  
て。

左手にはどこぞの肉屋の袋が提げられてるし、右手では、おそらく今日の献立が書かれているであろう紙を持っているし。全て推測  
だけでも。

「……………どうするかな」

何て、躊躇してる間に少女は商店街の奥へと歩を進めていく。

「とにかく追わないと」

というわけで、悩んでいても無駄と判断し、急いで後を追う。

気づかれないように、一定の距離を保ちながら後をつけて行く。

どうやら、既に関物が終わっているらしく、少女は商店街の端  
へと一直線に進んで行っている。

これなら好都合。人通りの少ない所なら、逃げ出されても追  
やすい。

いつの間にか、犯罪者寄りの考えが根付いている事に何ら違和感  
を覚えない僕は、慎重に後をつける。

ざわついてるはずの商店街。なのに、僕の耳には一切、音が介  
入してくる事はない。

まるで、視神経に全身の神経が集中してるような感覚。  
研ぎ澄まされる。

視界も極端に狭まり、先にいる少女のみに焦点が合わせられる。

一定のペースで歩く彼女は、無警戒。

いや、それは当たり前か。

まさか尾行されているとは、夢にも思わないだろう。



……——しかし、気づいていないのはどうやら僕の方だったようだ。

彼女が僕の尾行に気づいているなんて、夢にも思っていなかった。何処にも、自分が優位という確証はなかったはずなのに、僕は、僕が主導権を握っているとそう信じて疑わなかった。

あくまでも、僕が彼女を認識しているのであり、彼女は僕を認識していないと。

どうにも、甘い考えが脳髓を浸しきっていた。

その証拠に、彼女が商店街から一步出た瞬間、その姿は忽然と消え去ってしまった事に、僕は大きく動揺してしまったのだから。

「……っ」

慌てて、彼女が先ほどまで歩いていた場所へと駆け寄るが、そこには既に少女の気配はなく。

「くそっ！何処行った？」

周囲を見渡せど、存在しているのは一応に似通った家屋ばかり。失態。

千載一遇のチャンスを逃した。

そう、信じていた。

またも、僕は思い込んでしまっていた。

きゅらきゅらきゅら。

聞き覚えのある音が、不意に後ろから聞こえてきた。

「貴方は……………何者？」

振り向くと、そこにはまさに二週間前と同じ格好で立つ、一人の少女。

なんともまあご親切に、日本刀を鞘から取り出し、怪しく煌かせている。これなら、余計に判別が付き易い。

本物と偽者の。

ビンゴだ。

見事に本物。

にしても、やはり、スウェットに日本刀はどうにもしっくりこな

い。ご飯に牛乳の組み合わせ並みに合わない。ああでも、あれは色が合ってるだけ、芸術点は高そうだ。

おっと、くだらない考えは一時中断。

一步、少女は間合いを詰めてきた。このまま返答をしなければ、問答無用で裂けるチーズ（無駄にケチャップ付き）の完成だな。縦に裂けるか横に裂けるかは、シェフの気まぐれに任せよう。

と、言いたいところだけど、それは僕としても困る（チーズにケチャップは合わないだろうし）。

だけど、ここで正直に接触の目的を話してしまうと、逃亡後、雲隠れされてしまう可能性もあるわけだ。

それはそれで、僕らが困る。さらに一步、少女が間合いを詰める。カウントダウンを止めるコードを早く切らないとな。

赤か、青か、はたまたピンクか。某人気ドラマの最終回ではピンクだったかな？あそこまで、人口減少に一役買う仕掛けではないけれども。

というわけで、僕は黒色のコンセントを引き抜いた。協賛は東京電力あたりで。

「実は、二週間前、貴方に影から助けられた者です。もう一度会ってお礼が言いたくて、貴方を探していました」

胸元に左手を、瞳に誠実を、心に虚実を織り交ぜて、僕は言葉を紡ぎ出す。

あながち、感謝を言いたってのは嘘ではないけど、それが中心的な目的ではないからな。

咲月の顔がふいに過ぎる。メインはこちらのお姫様……のはず。

「……そう……なんですか？」

向けられた日本刀の切っ先が下がり、警戒のレベルが下がった事を確認。

「はい。覚えてらっしゃいませんか？二週間ほど前、ここから……えーと、北西に行った所にある住宅街付近で助けられたのですが」

「……………そう、言えば……………助けた気がします」

ここで、僕の警戒レベルもダウン。どうやら、素性を隠したがるヒーローではないようだ。素顔を曝して闘う、ヒーローショーも真っ青の新時代到来だろうか？デパートの屋上も経営危機まっしぐらだ。まあ、どうでもいい。

「良かった。覚えていて下さったんですね」

むず痒い。こんな恭しい、心にもない敬語は。そう言えば、僕はキュウイフルーツ食べると、口内が異様に痒くなるんだよな。あれは、アレルギーの一種なのか？

っと。これもどうでもいいか。原因が分かるにしろ分からないにしろ、それでも僕はキュウイフルーツを食べるのだから。いやだから、どうでもいいっての。

「……うん。たぶん……」

あやふやな返事。だけど、肯定には変わりない。今、確実にヒーローの中で僕は知己の者へと変貌を遂げた。

さらにもう一押しといきましょう。

「それですね、貴方にお礼を言いたいのと、もう一つ、僕の中で欲が生まれてしまいました」

「……………何でしょう？」

「ええ、そのですね。これまで、影には物理攻撃が効かないというのが常識といえますか、定石といえますか、襲われたら終わりというのが当たり前だというのはご存知ですよね？」

ヒーローは小さく頷いた。

「でも、僕を助けてくれた貴方は、影を倒した」

既に、地面と友好条約を結べそうな高度にまで落ちた日本刀に視線を向ける。

今度は敵意なしに、日本刀の切っ先を上げるヒーロー。

刀身を見つめる目には、特に色はなし。ただ、見つめている。いや、視界に入れた、かな。

「知りたいんです。なぜ貴方が影を倒せたのかを」  
さらに一押し。

純朴少年を気取るのも、どうにも気持ち悪い。歯が浮く。早く済ませたい。

一度僕の日と交信を図った後、ヒーローは鞘に日本刀を戻した。きゅらきゅらと。

「……わかりました。……その代わり、場所を変えてもいいですか？」

とことん、子供のヒーローにはなり得ないヒーローだな。

ヒーロー物は、その正体や秘密基地がばれるかばれないかの瀬戸際が面白くもあるのに。というか、僕はそこにしか注目しない。

——しかし、どうにもあつさりしてるな。

こうも簡単に他人を受け入れるのには、何か裏がありそうな気もしないでもないけど、ここまでの限りだとそこに黒さはない感じだし。僕の人を見る目がないと言われればそこまでの話なのだが。

本当にそんな感じではない。微かな嫌悪感もないし。

むしろ、どこかこうなることを望んでいた、という感じがするな。

いや、それこそ勘繰り過ぎか？

まあ、今はせっかくの機会をわざわざ潰す必要もないし、ついて行くことにしよう。

咲月の為にも。

友の為にも。そして、僕の為にも。

まあ、その比率は何とも公表できないものになりつつあるけども。

### 三人はそれぞれの色に染まる

翌々日。

今日は休日。

時刻は正午。

「なーなー、まじなのか？まじなのか？」

肌に照りつける、というよりは、そろそろ肌に突き刺さるといった方が市民大多数の賛成を得る事が出来そうな日差しの下、鼻息荒く、まさにその表現がぴたりと当て嵌まる咲月が、僕の横を飛び跳ねながら歩いている。

数十年生きてきたけど、案外、鼻息荒くという表現を用いる事はなかったように思われる。

それが、現在の若者の無頓着・無関心主義を象徴しているのかもしれない。

とか、三流評論家が言いそうな事を、百円均一のイヤホン並みの音質で心の中へと流し込んでみた。

うん。意味はない。

「まじのまじだよ」

と、僕もそのテンションに合わせてながら、言葉を返していく。

「にひひー。楽しみだー。まじに楽しみだー」

遠足気分。腕を普段以上に振り上げ、意気揚々と歩く様は堪らなく愛お（自主規制）咲月。

「早く着かないかなー。まだかなまだかなー。学研の、おばちゃんまだかなー？」

咲月のテンションは天井知らずのようで、今後もし昇傾向は暫らく続きそうな勢いだ。日本の景気もこれくらい簡単に上昇してくれるば、派遣村なん（自主規制）。

ちなみに、現在地はヒーローを発見した商店街を抜けた辺り。詳細を述べると、ヒーローを口説き落とした地点をただいま通過した

ところ。

「にゃひひー。にゃひひー」

咲月は言葉に意味を持たせる事もままならぬほど、高揚しているようだ。ついでに、頬も、紅葉している。季節外れだな。

まあでも仕方ない。これから恋焦がれていたヒーローに会いに行くのだから、その喜びも一塩だろう。

ヒーローと再会した翌日、つまりは昨日、ヒーロー発見と再会の約束を取り付けてきた事を伝えると、嬉しさなのかよく分からないが、僕に遠慮の一切ないドロップキックをかまして来たくらいなのだ。

個人的には、女性的な口調で歓喜を表現してくれると信じていた、妄信していただけに、何とも無残な結果である。まあ、いいけどさ。蹴られたら蹴られたで、それはまあ、なかなかよかったわけだし。

「えっと、ここから右だよな？」

ご機嫌な咲月を横目で見つ、あそこまでの道を間違えないように、慎重に記憶を再生させる。

どうにも分かりづらいところにある、利用者の事を全く考慮に入っていない立地に微かながら苛立たしさも感じるが、そこに文句を言っても仕方がない。

というわけで、幾度となく記憶と照らしあわせながら、右に左に角を曲がり、住宅街を抜けた所にある小規模な廃工場へと無事に辿り着いた。

「ふいー。迷わず辿り着けた」

満足げに鼻を鳴らした僕。やはり、土地勘がないとこでの行動は無条件に緊張するものだ。

「しかし、ここまで朽ちてるのか」

改めて廃工場を目視。

一昨日来た時は、既に太陽も沈みかけていたため、いまいちディテールを把握できていなかったのだが、太陽の光の下、全てが顕になるそれは築年数の二桁越えは二十年ほど前に済ませました、と

言わんばかりの外観である。

あらゆる箇所に設置されている窓はガラスを失い、風雨を防ぐ機能を果たしていない。壁の損壊率は十パーセントとくらいだが、如何せんくすみ具合も酷いため、それ以上に感じてしまう。

以前は来訪者を一時停止させていたであろう門も、今は万人ウェルカム体制だ。ボーダーフリーな時代に対応と言うわけだ。その心意気に拍手喝采。まあ、工場としてはそんなつもりは毛頭ないんだろうけども。

「ぼろぼろだなー」

テンションの上がり切っていた咲月でさえ、思わず冷静になってしまうほどの損壊具合。ん？ああ、今は門だけでなく、全身で訪問者を一時停止させる機能を果たしているのか。何とも贅沢だな。

「で、で、この中にヒーローはいるのか？」

やはり、一時停止以上の役割を求めるのは酷か。咲月の目は再び爛々と輝き出している。まあ、別に一時停止する必要もないのだが。ん。もうそれはばっちり」

腕時計を見る。デジタル時計のディスプレイ上で十二と十が仲良く並んでいる。

「少し、約束の時間過ぎちゃってるし、早速入るか」

「イエッス！ふふー。やっと会えるー」

意気揚々と廃工場の敷地内に足を踏み出した咲月。

僕は一步後ろを付いて行く。

門から本体までの数メートルを歩き終え、咲月と僕は錆で茶褐色に彩られた両開きの扉の前に立つ。僕は一步引いているけど。

「じゃあ、開けるよ」

かつてないほど、真剣な顔の咲月は扉に手をかける。僕は一步引いてその姿を見守る。

「よろしく」

空気を読んで、僕も無駄に真剣な顔で促した。一步後ろに引いたまま。

一度頷きを入れ、咲月の手に力が入ると、ギギギッと不快な音を立てて扉は開いていった。

「ようこそ、我が根城へー」

扉が完全に開ききる前に、工場の中から人影が飛び出してきて、咲月を覆うように絡みついた。

「ふござ？ もももももももっ！」

突然の事に反応できず、なすがままの咲月。その小さな体は、僕の方角からだと鼻から上を残して全て見えなくなってしまっている。

「ああんもう、最高！ この感触、堪らない」

「ふもー！ ふもー！」

咲月の体を這う二本の腕。弄る弄る。

再び、咲月の顔は季節外れの紅葉を始めている。意味合いはだいぶ違うそうだけど。

咲月、ごめん。こうなる事が分かってたから、お前を一步前に立たせてたんだ。と、謝罪よりも前に、とりあえず助け出すか。

「幸奈さん。僕の友達に不埒な行為をしかけるのは止めてください」

僕の声に反応してくれたらしく、上下黒のスウェットを着た女性の手を止め、こちらに目を向けてきた。

視線がかち合う。

「ありり？」

僕と咲月（失神寸前）を交互に見やるスウェットさん。暫らくそれを継続した後

「あはん。こっちは一昨日話してた君の友達か」

わざとらしく目を丸くし、上を向けた左の掌にジャンケンの構成員であるグーを模した手を乗せる彼女。

もっと早くに気づいてただろ。とは言わない。

面倒くさいから。

「けほっけほっ」

幸奈さんの呪縛を解かれた咲月は、喉元を押さえながら咳き込む。「あーっと。咲月？ こちらが僕らの言うヒーロー、もとい三城幸奈



さん」

「ふえい？」

虚ろな目の咲月は、状況をいまいち把握できていないようだ。酸欠状態に陥っていたせいか、視線は定まらず目は普段の半分ほどしか開いていない。

「ういー」

NOWLOADING、と顔に貼りたくなる状態が暫らく続いた後「ヒーロー？この人が、噂のヒーロー？」

と、夢現な声で僕に問いかけてきた咲月。

「ああ、そうだぞ。お前が会いたがっていたヒーローだぞ」

「あー、にひひー」

NOWLOADING……

NOWLOADING……

NOWLOADING……

NOWLOADING……

.....

-----

-----

☆

五分後。

廃工場内。

「すまんすまん。つついな」

工場内のソファに座り、謝罪と言うよりは、詫びを入れると言った感じに言葉を発した幸奈さん。お手々の皺と皺を合わせて、苦虫を潰したような表情を浮かべている。

ソファの上で胡坐を掻く様は、そのスウェット姿と相まって、残念なニート感を醸し出している。

「いえー、別に気にしてないですよ。ちょっと、驚きましたけど」

申し訳なさそうな幸奈さん（ニートスタイル）に対し、反対側に位置するソファに座る咲月は羨望の眼差しを向ける。

憧れのヒーロー、三城幸奈を目の前に興奮の色を隠せない咲月は、先ほどから胸の前で指を握ねくり回している。

そして、僕は咲月の隣に座り、腹の虫が鳴りそうなのを気合で押さえている。昼ご飯、食べてない。

「普段はこうじゃないんだが、ここにいるとな」

「ここにいると？」

幸奈さんは恥ずかしそうに頭を掻いた。

回想始まり

ヒーローと遭遇してから数十分後。

「……ここ、です……」

彼女に連れてこられたのは、廃工場。

「また、凄いとこに住んでますねえ」

既に太陽も沈みきり、周囲が暗いため、いまいち外観を詳細に把握する事はできないが、それでもかなりの年数だということだけは情報として得る事ができた。

しかも、ここに来るまでの会話の中で根城にしているということも聞いていた為、人事ながらもつついっつい心配をしてしまう。うら若き乙女が、こんなヤンキーしか溜まらなさそうな場所に暮らしているのかと。

「……………どう、ぞ……………」

廃工場の敷地内に僕を誘導するヒーロー。腰は低い。

日本刀を構えていた時は威風堂々としていたのだが、近くに寄って交流を図り出すと恥ずかしそうに目を逸らし、質問をしても三ポイントリーダーの無駄遣いをした挙句に、短い最低限の返事しか返ってこない。

気弱。

恥ずかしがり。

上下スウェット。

日本刀。

肉屋の袋。

廃工場。

ちぐはぐだな。全く異なるパズルのピース、一つ一つを集めたような人だ。

それが僕の彼女に対する印象。

本当に、ヒーローとは程遠い。

「お邪魔しまーす」

しかし、その印象が維持されたのは、工場内に入るまで。

「あー、そういや自己紹介まだだったな。俺は三城幸奈、十八歳だ。お前の名前は何だ？」

工場内に入ると同時に聞こえてきた自己紹介。澆刺とした声。工場内にもう一人居たのか？と目を凝らしてみるが、誰一人としていない。

「おい。何処向いてんだよ？」

「へ？」

冷静に声の元を辿ってみると、それは僕の後ろから聞こえてきたもので、しかも、発信源は先ほどまでシャイネスまっしぐらだったはずのヒーロー。

「キヤラ、違いすぎませんか？」

「ああ？どうでもいいじゃねえか。それよりも……」

「それよりも？」

「抱きついていいか？」

回想終わり

そう、このスウェットヒーローこと、三城幸恵さんはパーソナルスペース（廃工場内＋その周囲一メートル前後）でのみ本領を発揮

する、わかり易い内弁慶だったのだ。……………のだ。しかも、抱きつき魔十俺っ子の属性まで発揮する。

つまりは、学校では苛められっ子の地位に甘んじている高校生が、家に帰ると凄まじい剣幕で母親から金をせり取る傍若無人さんへと変貌する、みたいな感じかな。例えば的を得ている気は全くもってしないが、そこはさして重要ではないので話を先に進めよう。

「なるほどなるほどー」

幸奈さんの自己紹介がてらに、その特質まで聞いた咲月は納得したように頷いている。腕組みもオポジションでついております。

「ははっ。何とも恥ずかしい限りだ。ああ、そうだ。俺の事は幸奈でいいからな」

「はい！ 僕の事は咲月と呼んでください」

二人の間に和やかな空気が充満する。うーん、清々しい高原の薫りがしてきそうだ。そして、そんな空気お構いなしに、僕は自分の欲を素直に吐き出した。

「あのー、幸奈さん？ そろそろ、お腹が空いたんですが……」

「うん？ ……おおー、そうだったそうだった」

ソファを飛び降り、部屋から出て行った幸奈さん。ああ、そうそう。この工場内の内装を簡単に説明すると、普通の家、とまではいかないが、かなり手が加えられており、複数の部屋が存在している。さすがに、床はむき出しのコンクリートなのだが、空間を仕切るようにして立てられたベニヤ板等でしたっかりと部屋が成立なりたちしている。ヒーロー曰く、5LDK。たぶん適当。某番組のタイトルと同じだし。

まあ、どうでもいいけど。

というわけで、今現在、幸奈さんが向かったのは、キッチン。そして、僕らが居るのがリビング。テレビもある。廃墟にも関わらず、何故か電気・ガス・水道完備というから不思議だ。

「なあ」

ヒーローをその目にし興奮も和らいできたのか、咲月が話しかけ

てきた。

「何で、幸奈さんは僕らに昼飯をご馳走するんだろうな？」

「ああー、何でだろうな？」

二日前、このリビングで、幸奈さんに会いたがっている友達がいるという事を伝えたと

『おお、来い来い。連れて来い』

と快諾してくれたのだが、

『そうだなそうだな。せっかく友達を連れてくるなら、何かご馳走してやる。だから、明後日来い。丁度、土曜で学校休みだろうし、昼飯をご馳走してやる』

何故か、ついでに昼飯のお誘いまで受けたのだ。

というわけで、土曜日である今日、昼飯を頂く事になったわけだ。しかしまあ、彼女が自分の料理を振舞いたがる意味もいまいち分からない。まだ知り合って一週間も経っていないのに。

「まあ、貰えるんは頂いとう」

「そうだねえ」

分からない事は流してしまおう。一服盛るといったような悪意は感じないし。

んで、待つこと三分。

「おっ待たせー」

幸奈さんが料理が載ったお盆を片手に、上機嫌に鼻歌を鳴らしながら戻ってきた。同時に、部屋を満たす嗅ぎ慣れた匂い。

「おらよ」

ガラス張りのテーブルに置かれたのは、カレーライス。正確には、カツカレーライス。

隣の咲月の顔が引きつる。ひくひくひくひくと。痙攣してんんじゃないかと心配してしまうほど、引きつっている。

「さあ、遠慮せず食ってくれ」

容赦なく、ヨーイドン。

☆

二十分後。

「ご馳走様です」

「ごち……ご馳走様……ひぐっひぐっ……です」

僕と咲月は見事に出された物を食べきりました。味はカレーなんてどれも一緒だろ、と無粋な事は言いません。程よく効いたスパイスに、ほのかに香る数種類のフルーツ。そして、それらを邪魔せず、独自路線でカレーの旨さを後押ししたカツ。その揚げ具合も絶妙。総評としては、普通においしかった、ということ。はい。

「おお。涙を流すほどおいしかったか？」

咲月の食後リアクションを見て、自分の料理の腕を今一度再確認した幸奈さんは、唇を噛み締めながら目を閉じ、頭を大きく上下に振っている。

まあ、人間、完全にキャパシティ超えすると泣いてしまうんだな、という結論は胸にしまって、とりあえずは咲月の背中を優しく摩ってあげた。

可哀相に。憧れの人からのもてなしの品。残せるわけないよな。そんな事は露知らず、まあ知る必要もないけど、満足げな顔しながら幸奈さんは空になった食器をお盆に載せて部屋を出て行った。持って来た時よりもアップテンポな鼻歌を歌いながら。

「智也ー！」

「よしよし。よく頑張りました」

抱きついてきた咲月に敢闘賞を授けました。

☆

「で、今日改めて幸奈さんをお伺いしたのは、以前言ったとおり、影の事その他もろもろについてお聞きしたいからなんです……」

咲月が落ち着いてきた所で、話を本題へと移行させていく。まあ、

落ちてきてきたと言っても、ただぐったりと横になっているだけなのだが。おそらく、回復までには小一時間かかるだろう。なので、仕方なしにピンチヒッター。

「よっし。どんとこい！」

いつの間にか、姉御肌のなポジションに上り詰めた幸奈さんは、左手で握りこぶしを作り勢いよく胸を叩いたのだが、何者かの手によって衝突音は吸収されてしまった。なるほど。リーサルウェポンは所持か。

「でも、その前に、一言言わせてくれ」

と、幸奈さん。

「敬語はなしだ。あと、前にも言ったが、私の事は幸奈と呼んでくれ。どうにも他人行儀は好きになれない」

「了解」

「よろしい。じゃ、何なりと聞いてくれ」

「早速核心なんだけど、影を殺せたのは何で？」

ストリート勝負。ジャイロ回転には期待していません。

「男らしいじゃねえか。そうだな、それはひとえにこいつのお陰だ」  
そう言って幸奈が足元から拾い上げたのは、これで三度目の拝見となる日本刀。

「名前は特にないんだがな、こいつには影を直接攻撃できる特性が備わっている」

「直接攻撃？」

「そう。智也も分かっているとは思うが、影に対して普通の物理攻撃は効きやしねえ。拳も、弾丸も、ミサイルも、何も効かない。おそらくだが、核も」

そう言って日本刀を鞘から抜き出す幸奈。きゅらきゅらきゅらと、そろそろ耳に馴染んできた音が鳴る。

「ただし、こいつは別だ」

部屋の蛍光灯に照らされ、日本刀は独特の鈍さを持った光を放つ。目を細め、見つめた。

しかし、素人目には何も分かるはずもなく。

さて、そうやって来ると、次の質問はこいつだな。

「どうして、幸奈がそんな物持ってたんだ？」

ここで、なぜその日本刀で影を殺せるのかという事を聞いても無駄。どうせ理解できるものではないだろう。影をそれで殺せるのだから、それ以上でもそれ以下でもない。しかも、実際に僕はその瞬間を間近で見ているのだ。愚問にも程がある。

「なかなか鋭い質問じゃん」

不敵な笑みを浮かべる幸奈。

「恐悦至極」

深々と一礼。僕。

「そうだな。端的に言うと、これを私にくれたのは日本のとある機関。そして、これを使って、影をやっつけろと命令を下しているのも日本政府のとある機関」

「なるほど」

「驚かねえんだな」

「まあ、影を殺せる物を持ってるくらいだからな。この五年間、誰も殺せなかったはずの影を、だ」

まあ、別段驚く事ではない。それこそ、たまたま歩いていたらここに見知らぬ老婆から授かった、という方が遥に驚きだ。

「ふーん」

幸奈は先ほどよりも、不敵度を増した笑みを向けてくる。

「どうにも、俺はお前の事を勘違いしてたみてえだ」

「勘違い？」

「ああ。てっきり、お前は友達の付添いしてるだけかと思ってたが、そうじゃねえみたいだな。お前にはお前の目的がありそうだ」

「何でそう思う？」

「単純な話。そうじゃないと、そこまで考えねえから」

からからと幸奈は笑う。何とも人を見透かした奴だな。まあ、どうでもいいか。もしばれてもそこまで困る事でもないし。



「で、他に質問は？」

「そうだな。政府が関わってるって、かなり国家機密的な話みたいだけど、どうしてそんなに簡単に教えてくれたんだ？」

「ははっ。それは愚問だろ。これまた、単純な話。誰も信じねえから」

言いながら、くると日本刀を器用に指先で一回転させた。ペン回しできる重さじゃねえだろ。まあ、そこはどうでもいいか。

「確かに。今さら、そんな事を信じろと言うほうが無理か」

ただでさえ、噂になりそうでなかったヒーロー話。それを、ヒーローに接触する事に成功しました。実は日本政府の方が暗躍していたのです。なーんて、これまた頭がイッてしまった扱いされても文句は言えまい。夢物語も甚だしい。

世知辛い、本当に世知辛い世の中です。もっと人を信じようぜ、って本当にどうでもいいか。今僕らがヒーローに接触している。その事実は僕らの中では揺るがないのだから、わざわざ人に話して好奇の視線を買う意味もない。

「次の質問行ってもよろしいか？」

「どんどん来い」

「えっと、幸奈みたいな人は他にもいるのか？」

「んー、それは分らん。ああだが、勘違いするな。それは誰がいるかということが分からないってだけで、人数は把握してる。確か、俺を合わせて二十人、全国の適当な場所に散ばってる」

きゅらきゅらきゅらきゅら。日本刀がハウスしました。

「ほうほう。つまりは、実験段階って事か」

「鋭すぎて気持ち悪いな」

言葉とは裏腹に、幸奈の瞳には喜びともとれる色が浮かんている。「そういう感じだな。俺らはモルモットみたいなもんだ。地道に政府も対影の研究を進めているわけ」

「ふーん。でも、その日本刀を大量生産して国民に配った方が万事解決、だと僕は思うんだけど」

「それは俺も思うけど、とりあえずは俺の現状が政府の意思だ」

「なるほどねえ」

まあ、日本刀の耐久性は如何に、といった諸情報の収集もあるのかな？大量生産できない理由もあるかもしれないし。

「ちなみに、この廃工場を根城にした理由は？」

「趣味だ」

即答。清々しい。

その後も、いくつかの質問をぶつけていたわけだが、暫らくすると

「ぼ、ぼきゅも、質問を……」

そろそろ三途の川で水浴びをしているんじゃないかと僕をハラハラさせていた咲月が、弱弱しく手を上げた。一安心。

ああ、しまった！今の『ぼきゅも』発言は録音しておくべきだった。ファンクラブの奴らに高値で売れたろうに。くー、僕の馬鹿野郎。

「おう。でも、大丈夫か？」

ソファから立ち上がり、咲月の顔を心配そうに覗き込む幸奈。食器を片付け終えた後、ソファに倒れ込む咲月の様子を見て自分の失態に気づいた彼女は、それ以降ちらちらと咲月の方を見ては、申し訳なさを目に宿すという事を繰り返し返している。

「ふあい。全然大丈夫……うぷっ……です」

「そ、そうか。じゃあ、質問どうぞ」

「えっふお、その刀って売ってますか？」

「……い、いや、売ってはねえな」

うむうむ。どうやら咲月の脳は正常な働きをしていないようだ。

しかし、そんな咲月を気遣って、幸奈はさらに深読みをし

「これは日本政府から与えられた物でな、俺にも仕組みとかそう言った事はよく分かんねえんだよ」

と補足説明。

「ふへえ。そうなんふえすかー」

「おお、そうなんふえすよ」

つられてるつられてる。

というわけで、本日二度目の。

NOWLOADING……

NOWLOADING……

NOWLOADING……

NOWLOADING……

………

………

☆

結局、咲月の完全復活までに一時間ほどを要した。

その後、三人でいろいろと話し合いを続けた結果、咲月の強い希望もあり、今後、放課後などは幸奈に着いて回る事に決定した。幸奈も全く異存なく快諾。

咲月曰く

『影を倒せる方法のない事は分かった。でも、僕は諦めないし、一緒に行動する事で何かヒントを掴めるかもしれない』  
とのこと。

まあ正直、咲月の読みはものの見事に外れたわけで、悪あがきとは思いうわけだけど、それは言わない。咲月自身も分かっているだろうし、わざわざ言う事じゃない。

それに、個人的には幸奈と共に行動する事は賛成だし。

個人的に賛成するには、勿論個人的な理由があってこそなんだけども………。

———ああ、ああ、ああ、ああ。どうにも、駄目だ。駄目だ。駄目だ。膨れ上がるなあ。本当に怖いくらい、膨れ上がってきたなあ。

まあ、表には出さないけど。

出さないけどさあ。

まあ、どうでもいいか、と言いたところだけど、どうでもよくないか。

「最後に一つ」

廃工場から出る寸前で止まり、幸奈の方へ振り返る。これは聞いとかなければならない……と思う。いや、どうでもいいかな？単純な好奇心かも。まあ、そこはどうでもいい。

「何で僕らを招待した？そして、何で僕らの我が侘を受け入れた？」

「ははっ。やっぱりお前は鋭いわ。でも、あんまり鋭すぎると、女が寄って来ねえぞ」

頭をぼりぼりと掻き、幸奈は快活に笑う。むき出しになる齒は無防備に。それとは違い見えない心はどこまでも完全防備。と言った感じですか？

「そうだな、これまた端的に言うのと、俺だって寂しい時はあるって事だ」

「そうか」

「ああ、そうだ」

からからと幸奈は笑う。

「じゃあ、また」

「おう、また」

幸奈に見送られつつ、僕らは廃工場を後にした。

帰路。

僕は思案する。

半分本当。半分嘘。

かな。

今日の幸奈の話。予想だけど。ちなみに、何処が嘘で本当かは分からない。何となくの話。……少しは、見当ついてるかもしれないけど。話に粗が多いし。ははっ。僕は何様って話だな。

まあ、会って間もない人間を完全に信用するほど、僕もできちゃいないって事だ。

それはあっちも同じ。ああ、でも、最後のは信用してもいいかな？ たぶんだけど。

まあ、結局どちらにせよ、どうでもいい。

☆

週が明け、月曜日の放課後。

五時過ぎ。

約束通り、僕と咲月は幸奈と行動を共にすべく、廃工場へと赴いている。

夏の入り口を叩き始めた空は一日が終わるのを拒むように、未だに青色を元氣よく振りまいている。

まあ、その元氣すぎる空は色だけでなく、暑さと言うお友達まで連れてきているのだが。それにしても、暑いな。工場の周辺は全てアルファルトで舗装されており、ものの見事に人工的なジャングルを形成している。してしまっている。

所謂、アスファルトジャングル。

ああ、暑い。まあ、いいけど。四季に文句を言っても仕方ない。というわけで思考をここで一時停止し、僕の一步前に居る咲月へと目を向ける。

「幸奈ー。来たぞー」

と、咲月。ガンガンと加減することなく、廃工場から幸奈の寢床へとランクアップを果たしている建物の扉を叩いている。まあ、いくら年代物とは言え、咲月の力では壊れまい。

「んー、ちょっと待ってろー」

中から小さく声が聞こえ、暫らくすると昨日と全く同じ格好をした幸奈登場。つまりは上下スウェットに日本刀。

「お前、スウェットしか持っていないのか？」

と、僕。そりゃ突っ込みも入れたくなります。若い女子が毎日スウェットなんてさ。しかも、結構暑いのに。汗疹できそうだ。

「んあ？違うぞ。昨日のは黒色。今日のは少し色落ちした黒色だ」  
胸を張る彼女。うん。スウェット云々がどうしてもよくなるくらい、  
胸があるな。隣の咲月も思わず見入ってしまったている。

「よっしゃ。今日も元気に行きますかー」

そんな事は露知らず、というか気づきもせず、幸奈は出発進行。

一步、二歩、三歩。

「……じゃ、じゃあ、行きましょう……」

「やっぱり、幸奈は面白いな」

「だねー」

「……はい。……すみません」

パーソナルスペースを脱し、外界なのにインドア女子になってしまった幸奈を先頭に歩いていく。

右左右左右左真っ直ぐに。とにかく、複数回、角を曲り進んでいく。

住宅街を脱出したところで、咲月が口を開いた。

「ねえ、幸奈？」

「……はい……」

「いつものコースを回ってるんだ？」

「……はい。……いつもはですね。……適当なコ

ースを気の向くままに回っています……」

……残念ながら、影がどこに現れるかまでは分かりませんから」

三点リーダー倍々ゲーム。

ここまで人が変わると面白いと言うよりも、心配の方が大きくなってくるな。

まあ、気にしても仕方ないけど。

「ふむふむ。パトロールみたいなんなんだね？」

「……そういう、こと……かな？」

幸奈は何故か申し訳なさそうに俯き、両手の指を絡ませながらも  
じもじしている。何気に日本刀を胸の間に挟んでいるところが高得  
点。ふはー！堪んねえ！

うん？……ああ、なるほどー。これがギャップ萌えというやつですね。武器だなあ。これは、武器だなあ。心身ともに凶器だなあ。

「浮気はやだよ？」

そんな僕の脳内回路にハッキングしたのか、咲月が袖を引きながら上目使いを遠慮なくぶちかましてきた。しかも、空いている方の人差し指を加えながら。

言うまい。ここで、『お前はどんなキャラでいきたいんだよ！』

とは言うまい。無粋にも程がある。

「大丈夫。僕は咲月一筋だ」

「ははっ。気持ち悪いな」

言うまい。ここで、『お前はどんなキャラを僕に望んでんだよ！』とは言うまい。

「冗談は言いとして」

顔を引き締め直し、咲月は続ける。

「一日にだいたいどれくらいの影と遭遇するの？」

会話のベクトルは幸奈へ。

「……………えっと……………会わない日は会わないけど……………」

指を一つ一つ折り始めた幸奈は、どうやら脳内で影を切り捨てる作業に勤しんでいるようだ。

視線も自然と上へと向かう。

外界に來ると、脳の働きも自然と属性変化を起こすみたいだ。まあ、優秀だよな。萌えという方面に関して言えば。

「……………多い時は、一体くらいか、な……………」

「そこまで多くはないんだね」

「……………うん」

はははっ。ツツコマナイヨ。僕はツツコマナイヨ。何で指を五本以上も折ったのに、答えが一なのかについてはツツコマナイヨ。

いいんだよ。今の幸奈はそれでいいんだよ。

というわけで、適当な会話を繰り広げながら、僕らは歩みを進めていく。

本当に幸奈は適当に歩いているみたいで、ふらりふらりと僕らを惑わすように右左に折れていく。

その後ろ姿を追いながら、僕は奇跡的に助けられたのだなと改めて実感。単純な確立で行くと、影に抹殺される確立よりも低いわけだし。

運の使い果たしを危惧せねばなあ、と僕は考える。そんな僕の前で、咲月が勇猛果敢に幸奈に話しかけていく。彼としては、少しでも打倒・影に繋がる情報を手に入れたいのだろう。

いや、別に僕が三点リーダーの化身となった彼女と会話するのがめんどくさいから咲月を宛がっている、とかそういうわけじゃないですよ。

ただ、これからまたあのシーンを見れると思うと、顔がにやけてしまいそうになる自分がいて、そんな姿を見られたくない、というのが理由かな。

本当に嫌だねえ。

どうしてこうも、本当の自分は醜いのだろうか。甚だ迷惑だ。こんな自分は自分にとって迷惑だ。

でも、抑えられそうもないよな。気持ちを。

押さえられそうもないよな。ていうか、押さえ切れてない。口角が醜く釣り上がるのを。

終わってるよなあ。いつ静まる事やら。

☆

パトロールを始めて一時間程が経った。

いい加減に力尽きてきた空は、大好きな青色で自身を装飾する事を諦めたいらしい。徐々に、暗闇が町中を不法占拠し始めている。

幸奈は毎日、朝昼晩と二時間ずつパトロールを行っているらしく、そうなれば勿論今日は三度目。だが、朝昼のパトロールではまだ遭遇していないらしい。



「……………今日は、出ないかも……………しれません」

幸奈はしよげたように目を細め、既に熱を失い始めているアスファルトの地面を見つめている。その手に握られた日本刀は、持ち主の機嫌を伺うように沈黙を保っている。

彼女としては、僕らに影を倒すところを是非とも見せたいのだろうけど、そうは問屋が卸さないみたいだ。

「うん。そういう日もあるよね」

と、咲月。

「よく考えてみれば、確率的にも一人が何度も会えるわけじゃないし」

落ち込む幸奈を励ますように彼は彼女の顔を覗き込み、笑顔を無料配布する。サンプルの配布はなかなかの癒し効果を発揮したらしく

「……………ありがとう……………」

と幸奈は少しだけ気持ちを持ち直したのか、薄っすらと笑みを浮かべた。

端から見ればいい光景だけど、中身は何とも不謹慎だな。

影が現れない事を残念に思うとは。

ああでも、それは僕も同じか。

三者三様。

影の出現を望む気持ちは一緒だけど、その根底は全く違う。

一緒に行動しているのに、気持ちはばらばら。

歩くスピードも、歩く道も、歩く距離も同じなのに、心は互いの与り知らぬ所を駆け巡る。

ばらばら。

ばらばら。

果たして誰の心が一番澄んでいるのか。

僕は知らない。

咲月の事も知らない。僕は聞いていない。彼が何を根底で思っているのかを。

打倒・影。それは知ってる。でも、その奥は聞いていない。だから

ら、知らない。

幸奈の事はもっと知らない。彼女が何を思い、影を殺しているのかを。仕事？使命？命令？知らない知らない。何も知らない。

まあ、どうでもいいけど。

まあ、どうでもいいけど。

「……あ、運は良かった、みたい……」

つらつらと精神汚染物質しか生まないような思考を繰り返していった僕の前で、きゅらきゅらと日本刀が鳴いた。

実に嬉しそうに、鳴いた。

「影……これが、影」

幸奈の横に居た咲月は一步退く。

そして、その咲月の更に二歩ほど後ろに居た僕の目に映り込んでくるのは、影。

どこまでも、どこまでも、黒く。街灯の灯りも、家の窓から零れてくる灯りも、空を横断する月の光も、全てを吸い込むように黒いその姿は、脳裏に焼き付いた光景を引きずり出してくる。

静かに、ゆらゆらと、影と世界の境界線は揺れる。

あの時と同じように。

揺れる。

揺れる。

「あ……あ……」

その雰囲気飲み込まれてしまったのか、咲月の目は完全に瞳孔が開き、動かなくなってしまった。

「……下がって、下さい……」

幸奈の声に緊張が走る。

手に持つ日本刀が、場の空気をさらに冷やしていく。本領発揮。獲物を捕捉。切っ先は影へ。

しかし、影は緩むことなく、揺らめきながら幸奈との距離を詰めてくる。

「咲月。こっち来い」

硬直した咲月を無理やりに僕の側まで引きずる。掴んだ手は、分  
かり易く震えていた。

「……あれが、影」

「ああ、そうだ」

「怖い怖い怖い………」

がちがちと歯を打ち鳴らし、僕の制服を強く握り締める咲月。自  
身の存在を繋ぎとめるように、きつく握り締める。

そんな咲月を落ち着かせるために、僕は強く肩を抱き寄せた。

「大丈夫。幸奈がいるんだ」

半分自分に、半分咲月に言い聞かせる。

僕も怖いのに是不変わらない。

そんな僕らを余所に、幸奈は日本刀を上段の構え、いや、それ以  
上に振り上げ、構えている。そして、ただ影の接近を待つ。圧倒的  
な存在感。影がこちらまで来るイメージが微かにも湧かない程の存  
在感で、僕らの前に立つ。

「

………ふっ」

振り下ろされた。

躊躇いなく。

躊躇なく。

迷いなく。

ぶれることなく。

上から下へ。

どこまでも重力に従順に。

そして、日本刀に空間を明け渡すように、影は他愛もなく割れる。  
そして、割れた影は地面と友好条約を結ぼうとする。

一方的に。

我が俤に。

独りよがりに。

地面に縋り、そして、拒絶されて消えていく。

暗闇が滲む世界の中で解けて、暗闇が滲む世界の中へ溶けていく。  
じんわりと。

じつとりと。

きゅらきゅらきゅらきゅら。

獲物を食った日本刀は、琴線に触れる声で鳴き、主人の鞘の中へと戻る。

本当に気味の悪い程、触れてくる。

「……………もう、大丈夫です……………」

振り向いた幸奈は緊張感が解けたのか、頬が緩み目尻も下がっている。所謂、笑顔。ただ、それは独りよがりな笑みではなく、僕らを守れたという安堵感から来る微笑みに近い表情。

愛情？友情？それとも……………

まあ、どうでもいいか。

にしても、影は抵抗することなく殺されるんだな。

僕が襲われた時は背後からの攻撃だったし、仕方のない事かもしれないけど、しかしどうして今日は無抵抗なのか。

不思議だ。見えてないのか？危機感がないのか？それとも、反応するための何かを持たないのか？でも、人間の目の前に現れて襲撃してくる事を鑑みれば、確実に人間を感知する事はできているわけだし。

ん？ああでもよくよく思い出してみれば、影がわざわざ攻撃を避けたという話も聞いたことないな。

三年以上前の記憶だけでも。

じゃあ、やっぱり危機感のなさか？無敵だぜベイバー、みたいに。  
うん。まあ、いいか。

「咲月？大丈夫か？」

未だに僕の腕の中で縮こまる咲月に声を掛ける。

「……………うん。大丈夫、大丈夫」

「そうか。……………よかった」

言葉とは裏腹に、震えの止まらない咲月を更にきつく抱きしめながら、僕は見た。見てしまった。

咲月が何かを確信したように笑うのを。

いや、もしかしたら勘違いかもしれない。

見間違いかもしれない。

ああ、でも、それもどうでもいいか。

どうでも。

それ以上に、僕は……………――――。

☆

その日。

咲月は初めて影を見た。

僕は二度目の遭遇をした。

幸奈は僕らの目の前で初めて影を殺した。

それは疑うことなく、日常の延長線上で。

しかし、それは僕らを日常から切り離すには十分な力を持っていた。

きっと、もう戻る事はできない。

いや、戻る必要もない。

僕は僕の思いを。

咲月は彼の思いを。

幸奈は彼女の思いを。

優先しているのだから。

勘だけど。

僕の事以外は。

ははっ。どうでもいいか。

僕の事以外は。

たぶんね。

## 閑話休題

幸奈と行動を共にし始めてから数十日が経ったある日。あ、いや、三週間くらいかな？まあ、どうでもいいか。

とにかく、いつものように放課後。

しかし、いつものようではない放課後。

僕は一人で廃工場の前に居る。

咲月はいない。

理由は単純。

『あー、ごめん智也。今日は家族との予定が入ってて、幸奈のところに行けない。申し訳ないけど、一人で行ってもらっていい？』

とのこと。

そんな訳で僕は

『おっけー。幸奈とランデブーかましてくるぜ』

との台詞を嫌がる咲月に押し付けて、ここに一人で来たわけだ。

頬を膨らませて嫉妬に狂う姿は、僕が勝手に想像して身悶えました。以前なら、咲月と言う飼い主抜きでは餌も食べれなかった僕。しかしどうして、なぜか独り立ちのできた僕の場合は、何とも言いがたい腐敗臭を撒き散らしながら（僕の内部限定で）、このようにして一人で数キロを歩くという愚行を後押ししている。

ウォーキングで体の内部に健康を引っばってこようとしている全国の皆さんすみません。

しかしまあ、そんな自分が気味の悪い事この上なし。だけでも、最近はこの感情？とも言うのかな、それとも別の表現があるのかな？まあ、それはどうでもいいけど、この感覚、ああ、そうだそうだが、感覚だな。で、その感覚に抵抗なく心地良いと思える自分が居るわけ。

気味が悪いけど、抵抗なし。Mの境地か？まあ、どうでもいい。

振り返ってみれば……………ううーむ、何処で僕はこの境地に達し

たかな？幸奈と初めて行動を共にした時はまだ微かに抵抗感があったような。

だとしたら、次か？いやでも、その時もまだあったような……。じゃあ、次か？はたまたその次か？

分からん。確か、僕の前で幸奈が殺した影は合計で四。ん？だとしたら、三回目か四回目のはずだな。

いやいやいや、徐々に成長を果たしたという点も見過ごせない。ということは、初めからどの段階で、と考えるのがおかしい話か。んー、まあどうでもいいか。どっちにしろ、今、僕はこうなのだから。大事なのは過程よりも結果。

どんなに練習しても、試合で勝てなければただのゴミ屑。意味がないんのよ！

なんて、元ネタなしの意味不明発言を言ってみたり。これまた精神世界限定で。

「と、無駄な思考はここまでにしよう」

夏の中へと完全にダイブしてしまった空は、容赦なく太陽という光源を使用し熱中症を押し売りしてくる。

僕は本当に必要な物しか買いません。というわけで、

「幸奈ー。ランデブーしに来たから勝手に入るよー」

特に扉を叩くことなく開き、廃工場内に侵入。もとい、お邪魔します。

「おおー。いつものリビングに居るぞー」

と、幸奈の声が廃工場内を無造作に駆け巡る。乱反射。

いつもの、と言う言葉に誘導され、僕は入り口から数えて二つ目右手の部屋へと入った。

「いらっしやーい！」

そして、いつものように抱きついてくる幸奈、を見事にかわし、僕はクーラーの冷気で冷やされたソファに腰を掛けた。腰から背中にかけて、ヒエピタを貼ったような納涼具合が支配する。

体の血液が一気に冷却され、全身の力が程度良く抜けていく。

うむ。苦しゅうない。

気分は天下泰平後の徳川家康。天ぷら試食前。

「避けるなよ、智也」

僕と言う名の抱き枕を捕まえ損ねた幸奈は、いじけた様に口を尖らせている。しっかりと腰に両手も据えてあるあたり、本気なのだろう。

まあ、どうでもいいけど。ていうか、基準がそこかも分からないけど。そこを含めてどうでもいい。

「暑いんだよ。スウェットに抱き着かれると」

「俺じゃなくてスウェット？」

「まあ、本体だよな」

「新八的なポジションはイヤだー！」

とシャウトした幸奈。体も振る振る。それに少し遅れるように、サイドテールも体にぐりんと巻きついてく。

「ははっ。大丈夫。さっちゃんの要素も混じってるから。性別的な意味で」

「それも複雑！」

体を捻り込んだままよてよてと室内を闊歩し、幸奈は器用に僕の方かい側にあるソファへと倒れ込んだ。

眉間に皺を寄せ、コミカルな感じに頬を膨らませている。陸に揚げられたプクプク。

おっと失敬。レディに失礼。

「ありゃ？今日は咲月、一緒じゃないのか？」

プヒュー、という効果音と共に口から不満の塊を一気に放出した幸奈は、僕と一心同体、フュージョンじゃなくてポタラを使用してますと豪語してもおかしくはない咲月の不在に気づき目を丸くする。

「ああ、咲月は家族との団欒があるらしくて、今日は来ないよ」

とりあえずは、真面目に応答。

「にやにやーるほどだねー」

器用にソファの上で横回転する彼女。くるくるくるり。くるくる



くるくるりん。キャラ崩壊など微塵も頭にないようだ。いや、変幻自在キャラでいくつもりかも。

そんな幸奈をレンジで中途半端にチンされた為に、中心部分が冷たいグラタンのような目で観察する。所謂、冷静と情熱の間。つまりは、普通。

誰しも一回は、『それって普通じゃん！』って思った経験があるはずだ。

それはいいとして、幸奈はしばし回り続けた後

「じゃあ、今日は二人きりでデート、だー！」

何故か叫んだ。それはもう、くわつという効果音が見事に当て嵌まる顔をして。仰向けで。阿修羅だ阿修羅。

「すまん。浮気は咲月に止められてるんだ」

「儂い恋心。むしろ、下心」

「あったんかい」

「欲に素直が一番」

「じゃあ、早速行くか」

「もう、素直ね」

「アドバイスは活かしきります」

「見習わねば」

と会話にもならない不毛な言葉の応酬をこなした僕はいざ行かん、と腰を上げたのだが、幸奈がそれを制止する様に話を続けた。

「ちょーい待ちやがれ。せっかく二人しかいなんだし、聞いておきたい事があるんだ」

少しだけ真剣さを孕ませた声に、僕は無言で再び腰を下ろす。

今度は生暖かさが脊髄に纏わりついてきた。少し、不快だな。

「何だ？」

ここでもうやく、幸奈は僕と向き合うようにして座りなおした。ソファの上で胡坐を掻いて。

「答えられなければ、答えられないでいいんだけどよ」

視線を合わさないように、彼女は側にあった日本刀を手に取り、

きゅらんきゅらんと鞘から入れたり出したり

「智也の目的は何なんだ？」

きゅらっと日本刀は強制ホーム。お座りはまだ習得していません。  
「目的って？」

僕は惚けた様な物言いをする。まあ、幸奈の言わんとしている事は理解しているが、何となく本人の口からはつきりと言わせてみたい僕はちよいSかしら。

まあ、SとM、基本は臨機応変だと自負しているのだけでも。まあ、どうでもいいんだよっほーい。何だこのテンション？

「つまり、君が俺と共に影パトロールに付き合う理由だ。あの時は何となく流したが、今一度聞いておきたくてな」

ふむ。そう言えば、幸奈には早い段階からその事は指摘されていたな。特に隠す必要もなかったんだけど、それ以上に言う必要もなかったから言っただけだったし。

まあ、いい機会だとはさらさら思わないけど、暇つぶしがてら話してもいいかな。

というわけで、説明開始。

「両親を影に殺されたんだよ、僕は」

いきなり核心を突く僕。うん、男らしい。

「……」

幸奈は無言で先を話すように促してくる。まあ、確かに核心ではあるけど、答えではないしな。リアクションできるはずもない。ああ、いや、しない方が賢いのか。

こういったナイーブな話題の時は、話して側に確実な真実を話させるまでは余計な反応を示さないほうが吉。もし下手に分かったふりでもして相手の機嫌を損なえば、そこで終了、ゲームセット、少年はまだ見ぬ明日に向かって走り出してしまっただろう。

まあ、僕の今先ほど思いついた自論だけど。まあ、だからといって、特に意味はないけど。

「両親を殺された。あれは四年位前でしょうか。それはもう、それ

はもう、私は悲しみました」

悲しんだなんて記憶にないけど。そこはご愛嬌。話して側にも聞き手側に対する配慮は必要なのです。エンターテイメント魂とでも言いましょうか。

ただ、ありのままを話してしまっただけは、それは事実にはなりません。しかしどうでしょう、先ほどのように優しい嘘を一つ混ぜ込むだけでそれは素晴らしい調味料として、物語に昇華させるのです。事実は小説よりも奇なり？それは違う。事実を小説よりも奇にするのは、話し手の加える絶妙なスパイスなのです。

「悲しみ憎みだけど、はてさてどうでしょう。冷静になってみれば、両親の仇はあの悪名高い影。漆黒の帝王。新時代の覇者。シャドウプリンス。それはまるで身分違いの恋をした気分。どうしようもございませぬ」

どうしようもできたら、ここにいますはずありません。という言葉葉はバリウムで胃に流し込んで。うっぷす。喉に詰まりそう。

はふう、とアンニュイな溜め息をつき、両頬に手を当てる。ジェスチャーも不可欠。

「時間の流れは残酷なもの。私が何もできないと分かるや否や、疾風の如き速さで過ぎていくではありませんか。……………ふと気がつけば、私は武士であるならとくに成人、女性であるなら、結婚できる年齢を一年程過ぎてしまっていたのです」

つまりは十七歳。

「色褪せます。霞んでいきます。だけど、澱んではいきません。どんなに強い思いも、どんなに強固な意志も、時間と言うモンスターの前では立ち向かう事もできません。……………気がつけば、あの時の思いも何もかも、心の奥底に塵となって積もっていました」

決して肥やしとはなりません。産業廃棄物よろしく、核廃棄物よろしくな態度で私の心の夢の島で永遠の沈黙。

ここで一息。幸奈を見ると、思いのほか真剣に拝聴して下さっている。有り難いような、複雑なような。まあ、どうでもいいか？さ

あ、どうでしょう。心は読めませんことよ。

「しかし、神はあっさりと時間の前に屈してしまった私を見捨てませんでした。なんと慈悲深い神でしょう。人間を良く理解してくれています。さすが、創造主。気まぐれにも程があります。神野郎。おっと、暴言失敬」

無神論者ということの流れでカミングアウト。まあ、いいでしょう。続けませう。

「そう、私の前に救世主が現れたのです。私の心は弾け飛びました。でも死にません。でも弾けました。まさか、あのシャドウプリンスを倒す事が出来る人がいるだなんて。煌く日本刀。しなやかに舞う黒髪。サイドテール影を射殺す鋭い双眸。私は確信しました。妄信ではありません。確信したのです」

一拍。

「この人について行けば、憎い影の死に様を見る事ができる。無残に散りゆく様を、顔を愉悦に歪めて見る事ができると。私の心の奥底に形なく積もっていた何かが、再びその形を取り戻したのが分かりました。吐き気を催すほどの感情が湧き上がる。初めは止めようと思いました。しかし、徐々に意味がないと理解させられてからは、無駄な抵抗は止め、魔王の復活にむしろ助力したのです。ポーシヨンは九十九個使い切りました。フェニックスの尾は勿体無いので使えません。……さてさて、そんな私の現在は何？」

両腕をあらん限り広げ、私は微笑む。誰に向けることなく。何故か微笑む。これが現在の私。以上でも以下でもございません。

「……以上が、私の物語になります」

終劇。幕引き。スタンディングオベーション頂けるかしら？

「……………」

無言の観客。感動のあまり、言葉にもならないのかしら？でもやっぱ、拍手の一つくらいは欲しいわね。そうしないと、次回公演がなくなってしまうのだから。夢を追いかけての生活苦は、嫌ですよ？

「幸奈？」

ここで心地よい陶醉感に浸る自分を物語から引きずり出し、現実を向き直す。幸奈は僕の話が始まってから、その表情を変えることなく耳を傾けていた。

そして、物語の終幕を迎えた今も、変わらず表情を変えない。どころか、無反応。

「幸奈？」

もう一声。

「……ん？ああ、すまん。ちょっとヘビーな話に……な」

苦笑いとも取れる笑顔の彼女。歯が見える。白い歯が。しかし、歯茎は見えない。ふむ。どうにも、軽口で話したと自負していたのにそうではなかったみたいだ。やはり、最後のリアル感が不味かったかな？

でもまあ、終わった事は仕方ない。

「一応、これが目的かな。不純な動機ですみません。せめて、体の関係で我慢しますから」

「高いわよ？」

「おいくら？」

「日本の国内総生産」

「わおっ、無茶振り」

「じゃなくてな……」

こほんと咳払い。幸奈。

「あれだ。とにかく、智也の目的はしっかりと理解した。俺は本人じゃねえから分らんけどよ。お前がそうならそれで、俺は何も言わないさ。それに納得もした」

「納得？」

可愛らしく小首を傾げてみました。死ねばいいのに、僕。

「ああ。こんな俺に付きまとうなんて、余程の理由があるか暇人じゃないとできないしな」

からからと笑う幸奈。その顔には一抹の寂しさのようなものを感じ

じたような感じなかったような。他人ことはよく分かりません。というか、憶測は悲劇しか生まないと先ほど自分で言ったばかりなので、それに従いました。従順。柔軟。家訓にしようか。

「……そうだな、話してくれたお礼に俺からも一つお話を」

「ギブアンドテイク？」

「イエース」

「じゃあ、体を……」

きゅらきゅらきゅ……。

「どうぞ。お話をどうぞ」

深々と頭を下げ、それとは対照的に声のトーンを上げる。うーん。器用。かしら？おっと、この口調、癖になりそう。自重。自嘲。

「えー、されでは皆さん。本日は『泣いた赤鬼』という少し切ないお話をお聞かせしたいと思います」

「あー、それ知ってるー」

「知っていても黙って聞けや。クソ餓鬼共が。二度と口も話も聞けねえように、鼓膜から先まで突き破んど」

いつの間にか複数形にされた僕。幸奈目線で本当に複数形に見えていない事を祈るばかりだ。オカルト系はどうにも苦手でヤンス。

「それでは始まり始まりー」

幸奈は軽やかに両の掌を弾き合わせた。

「在る所に、赤鬼と青鬼の二匹？二頭？二羽？んんん？あれ？……うん。とにかくいました」

早々と挫折を味わった幸奈は眉間を縦ラインで装飾を施し、顎をしゃくった。前途多難だ。

「赤鬼は人間と仲良くなりたくて、家の前に安心安全保証付き、今ならお菓子もついてきます、という事を書いた張り紙を出しました。でも、人間が簡単にその事を信じられるわけありません。鬼とは民話や郷土信仰に登場する悪い物、恐ろしい物、強い物を象徴する存在（ウィキペディアより抜粋）。恐れ畏れ、身近に感じても、決して親近感が沸く存在などではないのです（小萌先生風）。鬼は自

分の立場を理解できていなかったようで、ただいじけて河川敷の石を水面で跳ねさせる事しかできませんでした」

クラスで浮いてる男の子の話ですかい。僕も僕だけど、幸奈の適当な話具合もなかなかだな。

まあ、いいけど。今は静かにご拝聴願います。僕。

「しかーし、そんなノー河川敷・ノーライフな赤鬼に救いの手が。青鬼は赤鬼の為に一計を案じたのです（のです、が付いたら小萌先生認識で）。青鬼は言いました『僕が村を襲うけんさ、お前は村人ば助けんしゃい』と。なんということでしょう、青鬼は九州地方の出身だったのです。そして憤るのです。島田洋七の『がばい』の使い方が間違っていると。がばいにはすごいなんて意味はない。がばいⅡとでもって意味なんだと。それを聞いた赤鬼は決意しました。まずは島田洋七に正しい九州弁を教えるべきだ、と。閑話休題。青鬼の村人襲撃アーンドそれを阻止した赤鬼はヒーロー作戦に勿論、赤鬼は大賛成。これでようやく仲良くなれるんだ。夢見る少女のように胸元で指をいじいと絡ませる赤鬼を見て、青鬼が吐き氣と殺意を覚えたのは完全なる捏造」

閑話休題。僕、代打。

「で、作戦当日。昼下がり。青鬼はまさに文字通り鬼氣迫るといった感じの形相で村人を襲い始めたのです。ここで、鬼なんだから鬼氣迫るってのもおかしい話だね、なんて指摘は受け付けません。目安箱にでも投書しといて下さい。三ヵ月後に開封予定です。

二度目の閑話休題」

実は三度目。僕、暗躍。

「そんな青鬼を颯爽と現れたヒーロー赤鬼はものの見事に撃退。暑いデパートの屋上よりも涼しいデパ地下でヒーローショーをしたいと望むアルバイターも真っ青の撃退劇。そうなれば、村人の心はレッドデーモンの物。人の心を物扱い。語り部に与えられた特権は際限なしじゃあ！」

かかかかかかかかかかかか、閑話きゅうーだいっとおお

おお。いい加減、僕も故障してきたかな？

「そして、青鬼は姿を眩ませました。決して真実の発覚を恐れた赤鬼による猟奇的な殺人事件もとい殺鬼事件には発展いたしません。残念無念。指を咥えて事件の発生を期待していた金田一少年の一番は目安箱にポイ。……自身が側においては村人を怖がらせ、挙句、再び赤鬼が自分に接触してこようものならそれこそ元の木阿弥。そう考えた青鬼はどこかへと消えてしまったという訳なのです。それを青鬼の後書き？ノンノン。書置きで気づいた赤鬼は泣きました。それはもう、洪水になってしまいうのではないかというほど泣きましたとさ。御終い御終い」

そこまで言うのと、幸奈は両手の掌を力強く叩き合わせた。

「せんせーい！」

「はい、智也君。でも今のだと先生じゃなくて宣誓の発音・だ・ぞ？」

「若作りは止めてくださーい」

「こちらはまだ二十手前じゃい」

幸奈の目はマジでした。物語の延長線上の演技ではなく、マジに恋する五秒前の勢いでマジでした。個人的にあればHさんの黒歴史ではないだろうか？ドラマはおもしろかったけども。まあ、それはいいとして。

「何でこの話をしてくれたんですかー？」

無邪気さを装うとしても、結局はシースルーなビニール袋な為、特に意味はない。下心が見え見え。

「それはねえ、内緒だよー」

「ええー、宣誓だけずるーい」

「がきやあ、いてこまずぞ！」

「きやーきやー」

年甲斐もなく狭い部屋の中を走り回る十代後半。何とも背徳的だ。プレイと言われても否定はしませぬぞ。

むしろ、嬉々として肯定。



というわけで、不道德な遊びに小一時間も興じた後、僕らはいつものようにパトロールへと出発した。

何処となく二人の間に奇妙な空気が流れていたのも一興。

ああ、誤解のないように付け加えておくと、決していなくなってしまうた青鬼搜索の為ではないのであしからず。

まあ……………いや、ここの考察は☆を挟んだ後にしよう。

☆

はてさてどうしたものか。

と、僕は思案する。

現在、幸奈との二人きりのデートを終え、帰宅の途に着いている。空にふわふわと浮く月は眠たくなるような光を発し、その周囲に広がる従者である星共は主人の輝きを邪魔しないよう、細心の注意を払いながら細々と光を発している。

夏に気前良くダイブしたとは言え、さすがにまだ夜にまでその影響は出ておらず、涼しさを感じる風が吹いている。

不定期に。

吹く度に僕の体温を少しばかり攫うその風は、何とも無味無臭で邪魔臭い。

思考の妨げにはならないが、無ければ無い方がいい。体にいちいち変化が生じるのはどうにも煩わしい。こういう時限定で。

まあ、どうでもいいけど。

さてさてさて、真面目に考えますか。

脳の有酸素運動開始。

ストレッチパワーが溜まり過ぎてオーバーヒートしない程度にね。今日の幸奈の話の根元、根幹を弄っていきます。もとい、推測します。

いや、推測するも何も、もう結論は見えているわけだけど。ただ、不可解な要素もあるから明言はしにくいつてだけで。

それにしても、どうして人というのは相手に真実を伝えようとした際に、思わずふざけてしまうのだろうか？

恥ずかしいから、というのが最も妥当な線で一番可愛らしい。実に日本人らしい。それにこの場合は、核心部分だけは誤魔化さずに伝えてくる。あくまでも、おふざけを挟むのは、核心に影響を与えない部分だけ。

最悪なのは、真実を伝えてはいるけど、それを真実として受け止めないで下さいっていう牽制。相手よりも、どちらかと言えば自分に對してかな。中途半端な覚悟しかないため、自分でも真実をどこまで言っているのか分からず、結果として、相手の解釈に依存してしまう。

核心部分にすら、平気で嘘が貼り付けられる。貼り付けてしまう。聞き手からすれば何とも厄介。下手をすれば、話自体が破綻してしまい、方向性を失ってしまう。

僕のは完全に前者。かなあ。

そして、おそらく幸奈は後者に近い。かなあ。たぶんだけど。まあ、全てが全て、重ね合わせができない分それは仕方ない。

——あの時のあの話。

勝手気ままな、いや傲慢且つ強引とも言っているいい推測ではあるわけだけど、あの感じだと青鬼は影、赤鬼は幸奈。元の話の様に友達という訳ではないはずだけでも、少なくとも幸奈が影の出現に関わっている可能性を示唆しているわけだ。

ギブアンドテイク。

幸奈の告白（？）。

でも、そこに確証はないし、確かめようも無いからこれは何とも言えない。ともすれば本当にただの昔話だ。幸奈は何となく僕の思い出話＋αにつられるように思い出した話をしただけかもしれない。僕が僕の話をしたのは、聞かれても特にデメリットはないと踏んでのこと。しかし、幸奈が話す事のメリットは何も無い。

もし本当に彼女が影の出現に関わっていて、僕の両親が死んだとい

う事に罪悪感を覚えてしまい、そのの懺悔のつもりならあまりにも短絡的過ぎるし、その他にも（両親失敬）影はあまりにも多くの人を殺してしまっている。

それこそ、焼け石に水とは言わないが、これほど無駄な行為はない。僕に許しを請うなら、全国ネットで切腹をすべきだ。それで事態が収まるわけではないけど。

それに、青鬼は赤鬼が人間と仲良くなった後は姿を眩ましている。

じゃあ、影は？ご周知の通り。全くもって、何処までが本場で、何処までが嘘なのか分からない。全て嘘ならそれはそれでいいんだけど。

理想的な着地点は、俺と智也を繋いでくれた赤の他人である影に感謝。くらいの話。うーん、差し障りない。もしくは、前述のような全くの無関係。ただのお話。物語。

と、ここまで無駄な推測を披露したわけだが、これこそが本当に意味が無い。ただの推測はろくな結果を生まない。と、自分でも承知の上。

だからこそ、この話はここで御終い。真実が分かる日が来るまでは、気まぐれ幸奈の昔話（どちらの意味の昔話かも将来的に判明すればいいなあ）として脳内で処理しておこう。

僕としては、今は幸奈の話の真偽よりも、自分の事が心配になってきたわけなんだよな。

うん。どうにも違うみたいなんだよ。何がって問われれば、影に対する思いが。今さら影を許します、って言うつもりは毛頭ない。ないんだけど、違うんだよな。

今日、幸奈に話しながら改めて気持ちを整理整頓したわけだけでも、何かしっくりこない。こなかった。こなくなってしまったと言った方が正確か。昨日までは僕は両親を殺された事で影を憎んでいるとばかり思っていたが、確実にそうだと信じ込んでいたのだが、しっくりこない。

じゃあ、何がしっくりこないのか？それが分かれば苦勞しない。ま

るで、オカルト現象だ。

昨日まで当たり前に通っていた道が、ある日突然なくなってしまった。周囲の人に聞いても、そこに道は元からなかったとの事。みたいな。

ああでも、今回は僕しか確認してないんだから、後半は余計か。つたく、怖い話は基本的に苦手だったのに。

うーむと悩んでいても仕方ないし、影が殺される事を見ればこの気持ちも落ち着くだろうと踏んでいたんだけど、そうは問屋が卸さなかった。

今日も今日とて、華麗に重力に引っ張られる日本刀に影が裂けるチーズ化されたんだけど、やはりしっくりこない。

いつもと違って、もやもややりんと霧が視界を覆いつくした。すつきりと晴れ渡らなかった。うーむ。もやもややりん。てくまくまやこん。もやもややりん。新時代の魔法使いが誕生しそうな予感。まあ、どうでもいいけど。

両親を殺されたから憎んでいるんじゃないのか？

ああ、ああ、ああ、ああ、違う違う違う違う。

だったら、何が僕を突き動かしている？

少しばかり長考（矛盾万歳）。

そして導かれた結論。

分からない。分からないけど、分かった事は、このまま影の死に様を見続けてもストレスで死んでしまうという事くらいだろう。

難儀だなあ。僕。

そして、どれほど親不孝なのだ。

自殺、した方がましじゃないか？

ああでも、それこそ親不孝か。

とことん、難儀だ。

### 三人の行先

分かり切っていた事ではあった。敷かれたレールを歩くようなものだった。行き先は変わらないのに、何度もだだを捏ねて行き先を変えようとしているようなものだった。そこには微かな意思も組み込めないというのに。

ダイヤ改正の際に、ジェイアールにでも乗り込んでみてください。少しは希望を反映してくれるかもしれません。貴方の刑務所行きと交換に。

うむ？後半が異様に軽い物言いになってしまったな。まあ、いいか。

「ああ、ぐぞー。苛々するー」

まあ要約すると、咲月の事です。

さて、僕が幸奈との行き詰まる攻防戦(?)を繰り広げてから早一週間。

あの後も変わらず幸奈の所に足しげく通い続けてはいるのだが、どうにもこうにも成果は上がらない。それどころか、活力を得たもやもやもやりんは僕の中を縦横無尽に駆け巡るばかり。

何とも無作法な化物である。いつの間にか、魔法の呪文という一認識から一個体としてのポジションを確立してしまっている、もやもやもやりん。まあ、どうでもいいけどさ。

分からないものを考え続けるくらい無駄な事はない。

というわけで、有意義に咲月のお悩み相談といきましょう。

「まあ、仕方ないさ。何となく、最初からそんな空気は漂っていたわけだし」

と、僕。ははーっ。最初からお悩みを投げ出してしまいました。

ちなみに現在地は学校の図書館。

昼休み。

昼休みは週刊誌とランデブーをかますおばちゃんも居ない。つまり、今現在、僕と咲月は二人きり。

かと言って、ここに居る意味も全くないのだが。あ、僕にとってはね。

昼休みに入り、いざ食堂と咲月を誘うべく話しかけたのだが、その時既に咲月の苛々はここを焦点に定めていたみたいで

「ちょっと来い！」

と、有無を言わずここに引きずられてきたというわけ。

で、そんな彼は目下テーブルの上に突っ伏し、頭をがりがりと掻きまわっている。マナー違反も大概にしろい、とは言わない。これはこれで咲月のMP（萌えポイント）な訳だし。

「お前がそんなんだから、こんななんだよ」

咲月は僕に濡れてもない衣を被せてきた。パンツ一枚で寝る季節に毛布は暑すぎる。せめて濡らしてくれ。

「僕は関係ないだろ？何となく、最初からそんな空気は漂っていたわけだし」

「リプレイすんなよー」

口をパクパク。足をジタバタ。手もバタバタ。そう言えば今日の六時間目はプールか。

「だって、どうせ幸奈に付きまってもどうにもならない事は分かり切ってたわけだし」

そう、咲月の苛々の原因は未だに影の倒し方が判明していないという事。スウェットヒーローの日本刀以外での。

出会って間もない頃は

『意地でもヒントを掴んでやる』

と意気込んでいたのだが、どうにも現実には順風満帆な道を用意してくれない。ただ、幸奈にひつつき虫の如く付き纏い、影の倒される瞬間を見学する。僕の目的は果たせど、ああ、いや、それも今は一概に言えないのだけど、とにかく、徒勞に終わってしまったのが現状。

そうなると咲月は

「だしだしだし、五月蠅いー」

我が俣な姫様まっしぐら。実は今週に入ってからずっとこの状態。ちなみに今日は木曜日。

ファンクラブの人達もあまりの咲月の苛々具合に心配したり興奮したり嬉々として映像に残そうとしたり、まあ反応は様々だ。

「別にそこまでむきになってやることもないだろ。幸奈が適当な数の影をやっつけてはくれているんだし」

また、だし付いた。口癖に昇華させるか？

「それじゃあ、嫌なんだよー」

ぶーぶーとクラクションを鳴らしてくる咲月。もともと我が俣ではあったけど、今回はもう駄々っ子に近いな。

「自分で手を下したいのか？」

「うん」

射抜くような目で僕を見てくる咲月。口は真一文字。僕の意見は一切取り入れませんと言う意思表示にも見える。考えすぎか。

「いやまあ、一応聞いておくけど、何でそこまでこだわるんだ？」

「……………前にも言っただろ？僕は影を許すつもりはないって」

「確かに聞いたけど…………」

「だあー……っ！五月蠅い五月蠅い！僕はとにかく諦めないからな！」

咲月は会話を潰しにかかった。自分で話を振っておきながらなんたる理不尽具合。

しかも、そのまま図書館から飛び出していきやがった。

残された僕にできる事。

「とりあえず、戻って謝ってみるか」

僕は何も悪い事してない気もするけど。

しかし、結局、その後咲月の機嫌は直ることなく燻り続け、僕との会話の為の外堀内堀を埋めてくれる事はなかった。

まあ、どうでもいいか。

明日にはあっちから謝ってくるだろうし。  
たぶん。

さーて、僕は自分のもやもやりんを倒す為に、幸奈の所に向かいますか。

どこまでも、どこまでも、どこまでも、体のいい言い訳だった。  
どこまでも、どこまでも、どこまでも、身勝手な振る舞いだった。  
分かってる。そんなことしても意味ないって。

分かった。そんなことしたら智也に嫌われるって。でも、ばれたくなかった。

影が許せないから、なんて。

聞いて呆れる。

言って呆れる。

これっぽちもそんな事思つてないくせに。

許せないだなんて、正義感溢れる事言っちゃって。

これは僕だけの問題じゃないんだ！　つていうニュアンスを含ませる事で現実逃避しちゃって。

自分から逃げちゃって。

本当にくだらない。

もつと素直になればいい。

なれば、  
どうなる？

曝け出して、どうする？

きっと、僕は止まらなくなる。

気持ちを抑え切れなくなる。

……もう抑え切れてもないかな。

あの日、智也からヒーローの事聞くまではここまでじゃなかったのに。

もう本当に、本当に、本当に、憎い。

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い



影が憎い。

抑え切れない。

幸奈に会ってから。

幸奈が影を殺すのを見てから。

影が殺せると分かってから。

あああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああつ！

憎  
い  
！憎  
い  
！

殺したい。

この手で。

僕の手で。

[illegible]

千切つて。

𪔐  
 つ  
 て。

踏みつけて。

噛み砕いて。

投げつけて。

刻んで。

潰して。

蹴つて。

決つて。

削  
つ  
て。

燃やして。

撃つて。

打つて。

壊して。

齧つて。

裂いて。

叩いて。

殴つて。

[illegible]

なのに、何で僕にはその力がない？

なんで幸奈なんだ？

僕じゃないんだよ？

くそくそくそくそつ！

……あ、落ち着け。落ち着け。

違う。違うんだ。ああああああああ、違わないけど、こ

れじゃないんだ。

僕が怖いのかこれじゃないんだ。

僕が本当に怖いのはこれじゃないんだ。

幸奈に会って、希望を見出して、でもその思いが破れて、それで

……その衝撃で出来上がってしまったんだ。

あの思いが。考えが。

僕の中で作られた。嫌な感触を伴いながら。

じわりじわりと。

僕はそんな事望んでいなかったはずなのに。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

なのに、なのに、なのに、なのに！

どうしてこんなに、鳥肌が立つほどに僕は興奮しているんだ。

考えれば考えるほど、興奮が抑え切れなくなる。

もう、嫌なのに。

「あーあーあーあー、あーっ！」

叫び声は、狭い住宅街の道に反響し、僕の鼓膜を何度も揺らした。帰り道。

僕の側にはいつも居るはずの智也の姿はない。

自業自得。

あれだけ学校で当り散らした上に、無視をしたんだ。

明日、謝らないと。

一転、後悔に苛まれ始めた僕。

見上げた空は陰鬱とした雲に覆われていた。

「あーあーあーあー……」

二度目の咆哮、を上げたその時だった。

「おーおーおーおー、ちよいとさあ、そのきみい」

後ろから、ねっとりとして全身に纏わり付くような声が聞こえてきた。

「……っ」

あまりの悪寒に、体は僕の意味を汲み取る前に自身を回れ右させた。と、同時に一歩後ろへと下がる。これも無意識に。

視界に映り込んできたのは、一人の男。

薄い。それが男を見た瞬間の第一印象だった。

切れ長の目に、決して高くはない鼻。そして、色素が薄く、厚みのない唇。体も線が細いという表現がぴたりと当て嵌まる。

服装も何の特徴のない白いポロシャツにジーンズ。

しかし、何よりも特徴的なのは、見た目や服装自体もそうなのだが、その身に纏う存在感自体が薄いということ。

目を一度逸らしてしまえば記憶から消えてしまいそうな程、薄いきっと、次に会った時は覚えていないだろう。

そう思えるほど、薄かった。

「おおい。そんなに睨み付けなくてもいいだろう？」

だが、自身の持つ雰囲気とは正反対に、無理にでも鼓膜の奥に潜り込んで来る声。一切の遠慮なく、神経に絡みつき、体全体に不快感を催す。そんな声。

声が印象的な人ではなく、声しか印象に残らない人。  
まるで体の印象の薄さをカバーするように声はねちっこい。  
話す度に口からスライムでも吐いてそうな勢いだ。

「あんた、誰だ？」

「んー、誰え？ そうだなあ。正義の味方、てとこかなあ」

「胡散臭い」

「そりゃあ、ちいとショックだなあ」

男は困ったように表情を変えるが、その変化は極僅かなもので、苦笑いだろうか？ 微かに口角が上昇するのが確認できた。表情も薄いなんて。

「胡散臭い」

男の全てを考慮に入れた結果、結論。結局は他人に話しかけられて警戒しない人はいなんだから仕方ない。

「二回も言わなくてもいいだろう？」

「用がないなら帰りたいんですけど」

毅然とした態度を徹底。不審者に会ったら逃げないさい。そんな言葉を小学生の頃はよく耳にしたけど、高校生になってからはあまり聞かなくなったな。そう言えば。

って、今はそこじゃない。

気を取り直し、男を改めて睨みつける。

「別に用がない訳じゃないさあ。今日は君に取って置きの物を持ってきた訳だからさあ」

「取って置きの物？」

「そうさあ。取って置きの物お」

そういう男が取り出したのは……。

☆

翌日。

咲月は学校に来なかった。

携帯に連絡したが、出る事はなく、ただ通話の繋がらない事を伝える定型句が何度も鼓膜を揺らすだけだった。徒労。

「何してんだか、あいつ」

と、思いつつも、放課後を迎えれば自然と僕の足は幸奈の元へと向かう。結局、昨日は影に遭遇することなく、幸奈に抱き着かれ損な放課後を過ごしてしまった。

いや、あの部分が夏の薄着のお陰で堪能できた分、無駄ではなかったか。……まあ、どうでもいいけど。

とりあえず、連絡が取れないのは仕方ない。

というわけで、今日も幸奈の元へと向かう放課後。まあ、明日には咲月も来るだろう。もじもじもじと恥ずかしそうな、気まずそうな顔をして。あー、やべ、興奮してきた。

勝手な友達天気予報を脳内で放送しつつ、僕は早足で目的地へと向かっていく。

うむ。もやもややりんは今日も絶好調。むしろ、増殖してんじやない？という勢いだ。繁殖期？発情期？思春期？ああ、最後のは今の僕か。

まあ、どうでもいいか。

にしても、今日は暑い。

幸奈の所まではいつも歩きで行くのだが、些か距離がある為、しかも夏である為、汗が嫌でも滲んでくる。

普段、運動をしない僕にとっては汗を掻くという生理現象はあまり心地の良いものではない。

もし、運動部にでも入っていたら抵抗なく汗を垂れ流す事ができるのだろうけど。今さらながらに自分の高校生活を後悔。

まあ、どうでもいいけど。

「ふう」

丁度、半分くらい距離を縮めた所で一旦足を止め、額の汗を拭う。やっぱり遠い。

やっぱり暑い。

特に最近は夕方になっても夏は町中に蔓延っている。夜更かしを覚えて、親の深夜のお楽しみに遠慮なく踏み込んで来る子どもみたいだ。全くもって不愉快。

さっさと夏が引っ込んで、紅葉に心揺れる秋が来ればいいのに。

ああでも、どうせ秋が来て冬が来れば、身を切るような寒さに文句を言うんだろうな。んで、冬が終わって春が来て、また夏が来て文句を言って……………エンドレス。

まあ、これは四季がある国に暮らす人々なら一度は感じたことのあるジレンマだろう。

「今さらだな」

適当な所で折り合いをつけ、再び足を進めようとしたその時だった。

「そこのきみい」

不意にその男は現れた。電柱の影から。

ゆーっくりと僕の前まで足を運び、ゆーっくりと顔をこちらに向ける。

薄い。パツと見の印象。

うーん、何ていうか、全て薄いなあ。見た目も、存在感も、全てが薄っぺらい。

「ちよっとお、いいかなあ」

ああでも、語尾が非常に不愉快だな。あと声質も。あんまり相手にしたくないタイプだ。

……………んん、この状況は少しデジャブ。立ち位置がちよっと違った気もするけど。って、幸奈に初めて話しかけた時だ。

これは気持ち悪いな。話しかけてきた相手は意図があるんだろうけど、こちらとしてはその意図が全く分からないから、この上なく気持ち悪いな。

気色悪いと言ってもいい。あまり変わらない気もするけど。まあ、それはどうでもいいとして、とりあえずは今の思いを口に出しておくか。

「嫌です」

全球ストレート宣言。

「これまた、はっきりしてるなあ。おいしい」

「嫌です」

捕手のサイン無視の独裁投球。

「昨日の子と同じで軽うくトラウマだよお」

「昨日の子？」

あー、なんだろ。あんまりいい予感がしないのは、男の発言のせいか、発言した際の男の顔のせいかな、さてさてどちらでしょう？

「そおう。昨日の子も酷い突っぱねようだったからねえ」

「それはそれは大層な事で。現代っ子は知らない人に話しかけられて笑顔で応対、お手々を繋いで歩きましょう、なんて教育はされていませんので」

いや、それは今も昔も一緒か。その基準が多少上がっただけで。

「ふうん」

と、薄男。表情も実に薄い。感情は分からないが、見た目通りに薄いんだろう。おそらく。

「おっとお、話が逸れたけどお、今日は君に良い事を教えようと思つてねえ」

「嫌です」

「曲らないねえ」

変化球を投げるなんて女々しい。とか、あの人のように言ってみたり（細かい違いはあれども）。

薄男も参ったと、苦笑いを浮かべる。これまた、薄い。顔に筋肉付いてんのかなってくらい薄い。まあ、どうでもいいけど。

「それはいいけどお、君のお友達に関わる事だからあ、聞いた方がいいかも、ねえ」

おいおいおいおい。嫌な予感かしらない。

「実はあ、昨日の夕方に君のお友達にとおーっても素敵なプレゼントをしたんだよお」

「プレゼント？」

「そおう。彼が欲しがっていたものをねえ。所謂、日本刀う？ いやあ、人に喜んで貰えるってのは、気持ちの良いもんだねえ」

薄い薄い薄い。言葉に含まれる感情が顔に反映されない。

能面の如く動かない。顔に張り付いた表情はその表皮ごと取り替えなければ一生まともな変化はしないのではないかという程の、圧倒的な無表情。

「あんた、何者だ？」

「そうだねえ。それは黙秘といこうかあ。おおっとお、それよりも早く探しに行ってあげないとまずかいもねえ」

「どういう意味だ？」

「ふふう。そのままの意味だよお。私は彼に日本刀、としか言っていないんだけどねえ、どうやら彼はそれを何かと勘違いしたみたいなんだよねえ」

不思議だねえ。と笑う。言葉が笑う。声が笑う。表情を固定したまま、笑う。

「でも、それも仕方ないのかなあ。だって、影についての『事』を知ってる人なんて、ほとんどいないしねえ」

「……っ」

あああああああーあーっ！急展開過ぎるだろ。何だよこれ。何だよこれ。じゃあ、あれか？今日、咲月が学校に来なかったのは、日本刀片手に影を搜索してたってのか？

「だーっ、ちくしょう！」

行くしかねえだろ。咲月が影に会う前に見つけないと死んじまうじゃねえか。

「あああ、あと一つ良い事を教えてあげよう」

これ見よがしに人差し指を立て、どこぞの情報屋気取りの男。

「影の親玉は三城幸奈だよお」

「それはどうも！」

ああーもう！ついでにいらんことまで入ってきたやがった。そん



なに脳内の情報処理速度速くねえんだよ。

せめてどっちなにして欲しかった。

ああでも、とりあえず今は咲月を探さないと。

僕は男に背を向けて走り出した。

背を向ける途中、男の顔が奇妙に歪んでいたのは気のせいだろうか？

たぶん、気のせいだろう。

まあ、どうでもいいけど。

☆

憎かった。

影が憎かった。

四年前のあの日、智也の両親が影に殺された事を知ったその時から。

だって、友達の両親を何の遠慮もなく殺して、友達を不幸にしたんだ。憎くないわけがない。

むしろ、憎まない方が異常だとさえ思えた。その気持ちには、両親が殺されて放心状態となった智也を見て、確信に変わった。

身近な人が殺されて、もっと身近な人が悲しむ。加害者を憎まない奴は頭の機能が停止しているに違いない。

そこまで思えた。

だけど、感情は風化するという事も理解していた。

それは人生の中で何度も経験する事。

先生に怒られて落ち込んで、次の日、その先生と将来の進路を話し合っ

て。親に叱られて泣いて、次の日の朝、いつものように笑顔で挨拶し

て。友達と喧嘩して、お互いに罵り合って、次の日の学校で馬鹿話

それは抗い様がないはずで、僕のこの気持ちもいつかそうなっていくはずだった。一抹の寂しさ。まだ風化の兆候も見られない時から、そんなものすら覚えるほどだった。

でも、違った。

明らかに、違った。

何回寝ても、何回朝を迎えても、憎悪は消えることなく、むしろ日を経るごとに膨れ上がっていった。

寄生虫の如く僕の心に入り込み、コンクリートに根を張る植物の如く深く深く食い込んでくる憎しみ。

栄養を筆取り、肥大していく。

異常。そう素直に思えた。

そうしたら、段々と怖くなった。自分が怖くなった。

早く消えろ。

早く消えろ。

ただそれだけを願って、僕は日々を過ごした。いつかパンクしてしまうんじゃないかという恐怖感と共に。

友達に助けを求める事は憚られた。自分でも異常だと感じている事を、友達に話してどうなる？

それで解決するなら、憎しみが消えてしまうという保証があるならいくらでも相談したさ。

でも、そんな確信はどこにもなかった。だから、できなかった。

もし、引かれたら。もし、気味悪がられたら。もし、怖がられたら。もし……………。もし……………。もし……………。

……………。  
……………。

だから、僕は自分の中で勝手な解釈を無理やりにこじつけた。

僕は影が憎いんじゃないかと、許せないんだ、と。

これは憎しみじゃない、憤りなんだと。いつの間にか芽生えた思い、意思なんだと。欺瞞に満ちた正義感で憎しみを覆い、自分を騙

した。

それは意外にも効果覲面で、僕はむしろその思いに自信さえ感じ、影の死を受け入れてしまっている人々に対して優越感さえ覚えるようになっていた。

自分は違う。他人とは違う。だから、僕はこの気持ち強く持たなければいけない。

欺瞞で精製されたはずの正義は、気づけば副次的な使命感さえ自身の中に生み出していた。

だけど、それがいけなかった。

『ヒーローがいるかもしれない』

その噂を耳に挟んだのは、丁度一年前。

僕の胸はこれまでにないほど高鳴った。

とうとう影に抗える人が現れたのだと。欺瞞である正義感とその欺瞞で欺瞞をコーティングした使命感が疼き出した。

それから、僕は影の出現地点を逐一把握し（詳細は企業秘密）、ヒーローの搜索を開始。これは智也に気づかれないように、夜中や休みを利用して行った。

別に隠す必要はこれといってなかったのだが、ヒーローを見つけた際の優越感を独り占めしたかったのかもしれない。

……あー、僕は自分を欺きながらも結局は歪んでいたんだ。

んんー、でもそれは今はいいか。

話を戻そう。

でも、結局ヒーローが見つかる事はなかった。噂といってももとも信憑性は低かったわけだしなあ。

噂にもなっていない噂を記憶から消去しようとしていた頃。

つまりは、諦めかけていた時にヒーローは唐突に姿を現した。

間が悪い。それだけじゃなく、場所も悪い。

どうして一年以上も探し続けた僕ではなく、智也の前に現れたのか。うににー。それはまあいいでしょう。

僕はそのヒーローと会うという願いの第一段階が叶った。見た目

は予想と大きくずれていたけど。それもいいでしょう。

このままトントン拍子で僕の正義感溢れる物語は進行して行くと思っていた。ヒーローに会えて、ヒーローから影を倒す方法を伝授してもらって、僕が影を人類の代表として倒していく。

個人的にはそれを智也以外に気づかれずに、影のヒーローとなるのもありだな、なんて事までプランニングしていた。皆が噂をする。昨日、ヒーローに助けられたんだ。昨日、颯爽と現れた救世主に命を救われたんだ。それを聞いて僕は静かに微笑む。みたいな？超クールだよなー。

でも、現実には僕の不正を許してくれなかった。改造手術も受けな  
いで、ヒーローになれると思っていたのかこの大馬鹿者が！と。  
それは実際にヒーローが影を倒した瞬間をこの目に捉えた時だった。  
突如として、それまで正義感に嚴重に梱包されていた憎しみが溢  
れ出して来たのだ。僕は久しぶりに感じたその感情に戸惑い、恐怖  
を感じながらも、どこか陶醉感を覚えた。

脳髓が麻痺し、意識と体が離れていくような感覚に鳥肌が立つの  
を感じた。心地いい？いや、気持ちいい。気持ち良かった。

長期熟成されていた為、よくないモノが混じってしまったのか？  
ううん、違う。結局は、偽りの感情は本物に、それがどんなに醜く  
歪んでいようとも、自分自身に毛嫌いされていようとも、勝る事は  
ないというだけ。

だけど、僕はこれに負けてはいけなないと、粉々に砕け散った欺瞞  
の塊を接着剤で修復し、もう一度憎しみを覆った。麻薬のように病  
み付きになる前に、依存してしまいうる自分を抑えて。

しかし、思わぬ方向に僕の心は作用し始める。

影を倒す事ができるのは、ヒーローが持つ日本刀だけ。これがヒ  
ーローを仮にも（本当に仮）目指していた僕に突きつけられた現実。  
徒勞。無駄骨。草臥れ損。

んー、でも別にそれはよかった。自分がヒーローになれなくても、  
それでも良かった。幸奈と一緒に影を倒して回る。僕は何もしない

けど。

それだけで、正義感（欺瞞）と使命感（欺瞞で精製された欺瞞）は満たされた。ただし、それは初回限定のキャンペーンだったみたい。

じわじわと僕の正義使命感は疼き出した。偽者のくせして自分を激しく主張してきたのだ。

幸奈が影を倒すのを見る度に、疼いた。動いた。でも、それ以上に問題だったのは、それに便乗するように再び憎しみが動き出した事。

そして、更なる問題として、偽りの両者は一度砕けてしまい、非常に消化し易い状態にあった事。突貫工事はいけません。後悔先に立たず。後の祭り。

咀嚼は最低限で済んだみたいだ。

ふひひー。偽りの正義感と偽りの使命感は、憎しみと混ざり合い、歪な形で『本物』へと変貌を遂げた。

見事なまでの歪み。

芸術点は何点でしょう？そうですか、難点だらけで点数はなし、と。落選決定。人としても落選？なははー、それは仕方ないかな。

「僕はもう駄目なのかー？ねえ、智也」

手元に光るは日本刀。

足元に広がるは赤の海。

「きひひー。もう、収まんないなー」

☆

「咲月、どこにいるんだ」

僕は走っていた。ただただ走っていた。

ただ？走っていた？

ああ、後半部分は正しい。じゃあ、前半は？  
なんで僕は走っている？



けなきゃと思っていたわけだし。

これも何か関係あるのかな？ もやもややりんの正体と？  
ははっはー。

「とりあえずー、学校行ってみるかー」

目的地・僕らの高校。

速度・時速十五キロ。

目標・咲月。

目的・前述の通り。

☆

俺の人生は真っ直ぐだった。

回り道する事無く。道草を食う事無く。後ろを振り返る事無く。

全て自分の意思で選択し進んできた。疑問など挟まるはずもない。  
疑問など挟むはずもない。自分が信じた道を進んでいるというのに、  
どこに疑問を持って言うんだ。

意味がない。無駄。蛇足。

そんな事を考える為の時間もカロリーも、全て無駄。無意味。自  
分が選択した道に疑問を持つほど人生の無駄遣いはない。

おそらく、それまでにとってもこれからにとっても、重大な決断  
をしたあの時のことですら、些細な引っ掛かりにも成り得ない。当  
然だ。

自分の選択は自分自身にとって絶対で、自分は自分の選択を信じ  
続ける事で人生を構築してきた。

それは自信となり、それは芯となり、選択された道に一種の使命  
感すら覚える程だった。実際、使命と捉えていた。

疑うべくもない選択は、使命。俺のすべきと考えた事は使命。

使命は俺の行動全てを支配し、息一つに至るまでに根を這わせた。  
それで良かった。それが良かった。使命による支配に俺は母に抱  
かれる地乳飲み子のように安心し、身を委ねていた。これでいいの

だと。

……その、はずだった。はずだったのに、今の自分はどうか？今の自分は何だ？何なんだ？

なぜ自分の決断に、使命に疑問を感じている？自分がそうしたいからしたいはずじゃなかったのか？

何をしているんだ。何を疑問に思う。

だって、自分がそうしたいからそうしたはずで、そこに迷いはなくて……でも、迷いがあるから疑問が出るわけで……自分は自分は自分は俺は俺は俺は私は私は僕は僕は……。

ちくしょうが！頭が痛え！

「おーいい、随分と悩ましい顔をしているじゃないかあ」

「……おいおい。相変わらず、声以外は存在の欠片も感じさせねえ奴だな」

廃工場のリビング（自称）。

ソファで蹲る俺に話しかけてきたのは、いつの間にかリビングの入り口で仁王立ちしている一人の男。いつ入ってきやがった？全く気づかなかった。いや、でもそれはいい。これが全く知らない奴ならビビるんだろうが、こいつなら特に……だな。

「五年振りかあ？なあ、三城幸奈あ」

「気持ち悪い声。五年振りとは思えねえな。昨日聞いたばかりかみてえに鼓膜にへばり付いてやがったぜ」

「そうかいそうかい。……んー、それはいいさあ」

五年振り……か。という事は、もう実験は終了って訳だな。にしても、こいつは表情も雰囲気も何もかも薄い。

五年前と全く変わんねえな。中身は分らんけど。いや、そもそもまともに話した事はあまりないな。

「もう……」

「もういいのか？」

「ははあ、そういうことだねえ」

「じゃあ、この愛しの廃工場ともおさらばなわけかー」



ふーん。そろそろだとは思ってたけどよー。と、ソファに座り直す。

その勢いでソファの背もたれに両肘を寄せ、右足を立てたままの左膝に乗せ、だらしなく天井を見上げた。

天井からは微かに光が入り込んでおり、未だ太陽がご健在な事を俺に伝達してきた。思えば、五年もここで暮らしていたのに上を見上げる事ってあんまなかったな。

常に前を見て。俺らしいと言えば俺らしいか。

「おっとお。でもその前に聞きたい事があるんだねえ」

「聞いときたい事？」

しっかりと目に焼き付けておくべく目を細め、廃工場の内装に焦点を絞っていた俺に質問が飛んできた。

「そおう。質問。あの二人は何だろうねえ？」

あつと、見られてたのか。今日はまだ来てないからこのまま何事もなく、って行きたい所だったんだけど。

「あー、あの二人はたまたま知り合ってた。所謂、おしゃべり友達って奴だ。大丈夫。何も話してねえよ」

毅然とした態度。これが一番。出来る事なら、俺の『弱さ』に巻き込んでしまった二人はこのまま無事に、な。

「そうだよねえ。やっぱりそうだったかあ。いやいや、予想はしてたんだけどねえ」

「あん？何を言ってるんだ？お前」

「いやあ、やっぱりバグを起こしてるなあと思ってねえ」

「は？」

明らかにそれまで存在していなかった存在感が目の中の男から発せられた。

☆

校門側に位置する校舎の四階。

そこに僕と咲月の教室がある。

とりあえず、学校に到着した僕は可能性を片っ端から潰す為のローラー作戦を展開する事にした。まずは、教室へ。

「咲月っ！」

開いた扉の先には誰も居らず、机と椅子が明日再び使用されるのに備えて静かに力を蓄えているだけ。

つまりは無人。教室を絶賛占拠中の無機物達は、早く出て行けばかりに無音のプレッシャーを掛けてくる。

どうやら放課後になると昼間の主従関係は逆転しまうらしい。

まあ、どうでもいいか。

「次は図書館」

ドアを適当に閉め、る事無く僕は次の目的地へ。  
目的は変わらず。

河川側五階の僕と咲月の秘密の部屋へ進路変更。

教室を出て直ぐの、校舎中央にある階段を一気に上りきり、そのままの勢いで右折。さらに右折。視界が開け、目の前には二つの校舎を繋ぐ渡り廊下。急激な方向転換に、靴の裏が廊下に削り取られる感触が足裏に伝わってきた。

捻れそうになる足を何とか健常状態に保ちつつ、一気に加速。対の校舎へ。

とんとんとんと、目の前に存在する壁との距離を詰めつつ、小さく弧を描き、右折の体勢を取る。

「うおおおおおおりゃっ！」

掛け声と共に左手にある白壁を左手で弾き体を思い切り回転させ、見事、正面の壁に激突する事なく河川側校舎の廊下へ侵入。

かなり無駄な動きを含みつつ、残りの直線数十メートルを走破すべく、僕の足は止まる事無く掛けて行く。

そして到着。図書館。

「はあはあはあはあ」

呼吸を整え、ドアの取っ手に手を掛けて手前に引いた。

「咲月っ！」

図書室に充満する、独特の生温い空気と図書館独特の古びた紙の臭いが鼻を突く。それに紛れ込むように、あまり嗅ぎなれない臭いが鼻腔を擦った。

「あ、智也――」

「……咲月？」

視界に広がるのは、凄惨、その言葉しか当て嵌まらないような光景。僕の正面に立つ咲月の足元には赤褐色の水溜りが広がり、その中には人の胴体部分がだらしなく倒れている。

天井にまでへばり付いている赤い液体は、ぽたりぽたりと、途切れることなく自由落下をしている。

そして、僕と咲月の丁度中間地点には、胴体部分から見事な分離を果たした頭。

ごろりと、自分だけ血の海から離脱して息苦しくはないはずなのに、その顔には苦悶の表情が浮かんでいる。

「……っ」

慌てて鼻を覆う。血と認識した瞬間、鼻を突く臭いは明らかな嫌悪感を僕の中に作り出した。

しかして、おいおいおいおい。これは予想外過ぎる。

「何やってんだよ……。何で、何で、担任殺してんだよ！」

苦虫を潰したような顔で床に聞き耳を立てているのは、クラスの生徒が死んでも顔色一つ変える事のなかった担任の先生（一部分だけど最重要部）。

さすがに、自分の死には深く感じ入るものがあつたみたいで、それなりの表情を作っている。二度と変わらないのだから、造形と言った方が正しいのだろうか？まあ、どうでもいいけど。

「にひひー。やっちゃった」

興奮しているのか、上ずった声を発する咲月。担任とは違い、その顔には柑橘系の爽やかさすら感じられる。ねっとり、血が全身くまなく付着しているというのに。

そう思える自分も、そう感じさせる咲月も異常だ。僕は重々、自分の異常性を理解していたけども、咲月がここまでとは。

「やっちゃったって……お前。それにその日本刀……」

「んんー？これ？知らない人からの頂き物だよ。ああー、でも残念ながら、幸奈のと違って影を殺す事はできないけどねー」

手に持つは日本刀。視線を斜め下に落とし、剣先から滴る血を眺めながら咲月は、自嘲気味の笑みを浮かべた。

「知ってたのか？」

「知ってたのかってことは、智也も会ったの？あの存在感薄い男に」  
「ああ、さつき道端で……ってそれはいい……」

本当は良くないんだけど。くそっ。ここまで走ってきたのが意味なくなりそうだな。いや、とりあえずそれは置いておこう。それよりも、目の前の事態を收拾したい、かもしれない。まあ、興味半分。咲月は何を考えてんだ。

「それよりも、どうして担任を殺した？あくまでも、咲月が許せなかったのは影じゃなかったのか？」

「なははー。……そこは女心と秋の空って言うくらいだよ？女の子の心は七・変・化」

「今、それはいらねえだろ」

おどけて誤魔化そうとする咲月を強く言葉で威圧し、力強く見据える。僕の態度に不満を感じたのか、詰まらなさそうに頬を緩く膨らませる咲月。

「むむー。別に言ってもいいけどさー。……引かないって約束してくれる？」

「ああ、約束する」

自分も人の事、言えた性質じゃないし。

「じゃあ……。んんー、理由は結構単純なんだけどー、影を憎い憎いぜこの野郎って気持ちと、僕の中に溢れる正義感が混ざっちゃって、影だけじゃなくて影を容認している人も本気で許せなくなっちゃって感じかな。つまりは、正義の鉄槌を貴方にみたいな」

そう言って、足元の死体を日本刀で突き、微笑む咲月の顔からは、後悔の念は感じ取れない。

「ていうのは、理由の半分でー、もう半分は、影を殺せないならこっちでいいやって感じてかな」

「……っ」

醜くつり上がる咲月の口元に、僕の鳥肌も一斉に湧き上がる。咲月が今までに見せたことのない笑みを浮かべたのもその要因ではあるが、それ以上に、僕は先にある、深いところにある感情を感じ取ってしまった。

おそらく、咲月は自分の感情に従順になる事の快樂を知ったのだろう。僕と同じで。

だからこそ、この今の状況は嘘偽りなく、咲月の本心の表れなんだ。否定の余地はない。だからこそ、僕は……。

「むににー。引かないって約束したのに引いてるな」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだが……」

「別にいいけど。人を殺しておいて、引くなって言う方にも無理があるしねー。……ふう。でもね、僕だって本当は担任を殺すつもりはなかったんだよ？ そりゃあ、影を殺せない事に憤りは感じてたし？ 代わりに担任みたいな駄目人間を殺すのもありかなって思ってた。けどさ、それをやったら御終いじゃん？ 何もかも。全て。これまで、自分が積み上げてきた全て、無駄になっちゃうわけじゃん？ 人殺しは犯罪わけだし。重罪なわけだし。だから、必死に抑えてた。影を殺せるような方法が見つかるまでの我慢だって。思ってた。昨日、あの男からこの日本刀を貰うまでは」

咲月は目を細め、新しい記憶を弄くり返す。

「あの男、たぶん僕を何日か観察してたのかな？ 僕が影を殺したがつてるの知ってたみたいだし。本当に嫌な声だった。何もかもが薄い癖に、声だけはへばりつく様な気持ちの悪さを持ってた」

やはり、あいつか。何者だ？ あれは？

「んんー、まあそこは置いといて。結局はさ、そんな薄気味悪い奴

から貰ったものをおいそれと信じる事はできないって訳で。誰だつてそうだろ？何を信じればいいのか？そりゃ、あの男が影を殺す為に日本刀が必要だって事を知ってる時点で、かなり内通してるんだろうけど、だからって何で僕にそれを渡す？意味は？ない。きっとない。あるはずがない。クリスマスでもないのに、自分の一番欲しいものを貰えるはずもない」

笑顔を振りまく咲月の声は、微かに震えていた。

「そうしたらね、もうどうでも良くなったんだ。全てが全て、どうでも良くなった。散々、影を憎んだ挙句、僕の手元に舞い込んできたのは、ただの鉄くず。笑えるだろ？ただの命令で影を殺す幸奈には、影を殺す為の刀があって、両親を影に殺されたのに、ろくに憎みもせずに生きる智也の前にヒーローは現れて、本当に、笑えるだろ？こんなにも、こんなにも、必死の僕にはこんな鉄くずしか与えられないなんて、どこまで僕を馬鹿にすれば気が済むんだよ！」

「咲月……」

ここは同情すべき所か？いや、違うな。僕はもう、駄目なんだ。どこまでも、駄目なんだ。腐りきった僕の心はどこまでも冷めて冷めて、終わっていた。

「試してみればいいだろ？まだ、それが偽物って決まったわけじゃないんだ。また二人で影を探して歩いてき、試してみればいいだろ？」

そして、僕の目の前で死んでくれ。咲月。ははー、自分終了。

「なははー。智也はどこまでも優しいね。だから、憎めなかったの？影を憎めなかったのは、優しさ？両親殺されても、影は殺せない？」

くだらない優しさだね、と彼。

辛辣な言葉は僕の胸に突き刺さる事無く、ただ空を切る。咲月、そうじゃないんだ。そうじゃないんだよ。僕は。

「あー、困らせてごめん。別に智也を責めてるわけじゃない。ただの八つ当たりだから気にしないで。僕も気にしてないから。……………」

：でも、智也の言う事も一理あるし、一度くらいは影に効果あるかどうか、確かめてみようかな」

咲月は笑いながら血がへばりつく日本刀を、静かに首元に宛がった。

「おい……。何する気だ？」

「あははー。試したいのは山々なんだけど、でもね、さっきも言った通りもうどうでもいいんだよ。何もかもが。そして、自分自身も」

「咲月っ！」

刺さる。咲月の首に、突き刺さる。そして、どちゃりと、血の海へと、重力に導かれるように倒れ込む咲月。

何してんだよ何してんだよ何してんだよ。

側に駆け寄り抱き起こす。虚ろな目は灰色に濁り、こひゅーこひゅーと微かに息が漏れる音が聞こえる。

「咲月！咲月！」

叫んでも、叫んでも、咲月の目はさらに濁りを増していく。

「何してんだよ！何してんだよ！」

それじゃあ、意味がないだろ！

何かを言いたいのだろうか？唇が微かに動いているが、日本刀によって寸断された声帯からは声は出てくるはずもなく。

静かに、頬を伝う涙だけが、その感情を悟らせた。

☆

気持ちがいいほど、すんなりと僕の首を突き抜ける日本刀。首に、熱が走った。

でもその感覚も直ぐに薄れ、消えていく。代わりに、僕が感じたのは、体の表面に触れる熱。

「咲月！咲月！」

霞む視界の中で、智也が僕の顔を覗き込み、心配そうに叫んでい

た。なるほど。智也に抱きかかえられているわけですか。

うーむー、悪くないかなー。なははー。

「何してんだよ！何してんだよ！」

あーははは。やっぱり、失敗したかなあ。どうしても良かったのに、良かったはずなのに、そんなに必死に叫ばれたら未練残っちゃうじやん。

ああー、お別れの言葉言いたいのに、声出ないや。喉を刺したのは駄目だったね。

智也、何て目をしてんだよ。全く、もう。

本当にどこまでも優しいなあ。そんなんじゃ、いつか悪い人に騙されちゃうよ。僕はその時いないんだから。

嘘、言っちゃったなー。どうでもいいって言ったけど、智也の事だけはそうでもなかったのに。言っちゃったなー。

ごめんね。嘘、言って。智也、智也、智也、と……も……

……

……

……

――。

☆

重く圧し掛かる、咲月の死体。

手にはまだ体温が伝わってくるが、時間が立てば冷めていくだろう。

「……………」

完璧に濁り切ってしまった咲月の目は、もう二度と光を取り戻す事はない。

「ちくちゅう」

くそ……くそくそくそくそつ。どうしてくれんだよ。咲月は影に殺される予定だったのに。





「いやいや、意味が分からん。お前、何を言ってるんだ？」

俺の混乱は止まらない。男の余りにも全てを知りきった発言が心を激しく揺さ振る。こいつは知っている。俺の知らない俺の何かを知っている。

くそつ。胸糞悪い。

「何も何も、そういう事だよ。三城幸奈は実験のみを遂行するように、きちんと脳に細工されていたはずなのに、今こうして、実験以外の事にまで手を出しちゃってるからねえ。他の奴らはバグることなく終わったんだけど。……だから、私は反対だったんだよね。お前を出すのは」

どういう事だ？こいつは何を言っている。俺の脳に細工がされている？

そんなまさか。俺は俺の意思でこの実験に参加し、今ここにいるんだ。いるはずなんだ。なのに、どういう事だ？

俺は俺じゃないのか？

俺は、俺の意思でここにいないんじゃないのか？

☆

八年前。

某所。

公的機関による実験。

そういう名目で集まった少年少女数十名。

様々な機材が所狭しと置かれている部屋。無機質な臭いが鼻を突き、無機質な機械音が鼓膜を揺らす、その部屋の中で横一列に並ぶ、少年少女二十名。

その中に、俺はいた。

「では、これから実験を開始します。実験に協力の意思を表明していただいたご家族には深く感謝の意を………」

俺の目の前で白衣を着た男が、実験の開始を宣言し、資料を手渡

していく。

「えー、皆さん、既に内容は十分に理解されているとは思いますが、今一度説明をさせていただきたいと思えます」

手に持つ資料を一枚捲り、男は話を進める。

「今回の実験の主旨は、簡単に言いますと、生物兵器の開発です。それはウイルス等とは一線を画す、新たな生物兵器。人間に内蔵し、そこから無尽蔵にある種の脅威を生み出していく、新種の生物兵器。現在、世界情勢は非常に不安定です。いつ何時、日本に脅威が降りかかるかもしれません。そこで、我が国はその脅威を削いでしまうという決定を下しました。しかも、戦争をすることなく。それこそ、今回のプロジェクト。もし、この兵器の開発に成功すれば、日本の平和は未来永劫守られていくでしょう。皆様はその第一被験者として、誉ある役割を………」

続く説明。

俺たちは被験者として集められた。それぞれが、何かしらの同意を経て、ここに集められた。

他の奴らがどうかは知らないが、当時、十歳だった俺は、確実に自分の意思でそこにいた。疑う余地も無く、確実に自分の意思でそこにいた。

『国（、）の（、）役（、）に（、）立つ（、、）人間になりなさい』

両親にそう言われ続けて育ってきた俺にとって、この実験に参加する事はまさに親の思いを形にしたものだった。両親もこの話が舞い込んできた時には、手を取り合って喜んでいた。

だけど、それはあくまでも、付随的な要素でしかなく、自分自身が国の役に立ちたい、その固い意志こそが原動力となっていた。

実験の主旨は、現在から未来に至るまでの、日本に襲い来るであろう脅威を削ぐ為の兵器の開発。生物兵器、人間兵器の開発。さらに簡単に言えば、他国を内部から侵食していく為の兵器の開発。

この日本という国に、将来的にどれだけの脅威が待っているのか

は分からないし、それを考えて兵器を開発することにどこまで意味があるのかは分からない。だけど、自分にとって重要だったのは、それが確実に国の役に立つという一点のみ。その大小は分からない。しかし、確実に自分が役に立つ事ができる。それだけで、理由は十分だった。疑問の挟まる余地はなかった。

これまでそうしてきたように、今回も自分の意思でここに来たのだ。

「それでは、これからの三年間、実験の第一段階として、様々な人体実験を行っていきます」

そして、三年後、無事第一段階の実験を終えた俺たちは、再び、あの部屋へと集められた。

何も変わらない部屋に集まる、少しだけ成長をした俺とその他の子どもたち。

「皆さん、第一段階お疲れ様でした。これより、第二段階へと移行します。第二段階は実践。ここからは、新しく実験主任へと就任された……」

「ああ、名前はいいいよ。教えてもどうせ五年間は会わないだし、意味ないからねえ。……皆さん、こんにちはあ。初めましてえ。それではこれから、第二段階の説明を開始するよお」

ねっとり絡みついてくる声とともに、一歩前に出てきた男。印象に残らない顔をしていた。声とは対照的に。

「第二段階は、実際に町に出て、五年間生活をしてもらうことになるんだよねえ。皆さんの体に植えつけられたある特殊な細胞は、不特定多数の人々を攻撃する『影』と呼ばれる兵器を生み出す、ってのは聞いたよねえ？それがどれほどの有効範囲を持つのか、やあ、どれほどの期間働くのか、とかあ、どれほどの攻撃性を持っているのか、とお言ったデータを集める為に、君たちには外に出てもらうことになるからねえ」

固定されたように動かない表情は薄気味悪さだけを俺に伝えてく

る。横にいる奴らも同じ事を感じているのか、少しだけ視線を落として話を聞いている。

「この実験は多くの国民を犠牲にするんだけどお、でもまあ、君たちが気に負う事は微塵もないからねえ。ってえ、これも三年前に了承済みだから、今さら確認する事でもないかあ」

国の為の犠牲。不特定多数の犠牲。

「国の未来を考えればあ、現在における犠牲は仕方ないよねえ」

微塵もそんな事は考えていない。この男は。だけど、それは俺も同じ。自分の意思で実験に参加し、体を弄られ、人を殺す。

躊躇いはない。自分が選んだ道。

悔いはない。自分の意思が絶対なのだから。

純粹に、ただ、黙々と、実験を継続すればいい。

何も考えず。

何も思わず。

それが、俺の選んだ道なのだから。

.....そのはず、だったのに.....

☆

「記憶は作る事ができるしい、人の精神を操る事もできるんだよお。いやあ、より正確には、人の記憶を操作する事で、精神も支配できるって感じかなあ」

男は薄ら笑いを浮かべながら言葉を紡ぐ。

「簡単な事。実に、簡単。……な、はずだったんだけどねえ。でも、お前の場合は余程、元々の自我が強かったんだろうねえ。イレギュラーな動きをしてくれたもんだよお。一般人に積極的な接触を図るなんてさあ。しかも、せっかく生み出した影を殺してまでえ。余程、寂しかったのかいい？ やっぱり、被験者にも殺せないようにしてお

けば良かったかなあ。でも、影に殺されたら元もこもなかったしねえ。これは次への課題だねえ」

「ちよつと待て。意味が、意味が分からない。俺は俺の意思でこの実験に参加して、国の為に参加して、そこに間違いはなくて、両親も喜んで……くれ……て……」

あれ？両親？俺の、両親？俺は三城幸奈。両親は三城………。  
え？あれ？お父さんは……。お母さんは……。

「ああ、え、うううう、俺は三城幸奈で、三城幸奈で……」

「おやあ、そこまでバグっているのかあ。これまた、予想外だねえ」  
男はそこで始めて、声色を変えた。まるで廃棄物を見るような目で、見てくる。

「本当は、連れて帰って修復するつもりだったけど、これはいよいよ廃棄処分しないといけないかもねえ。あの一般人みたいに」

「え？……今、何て言った？」

「んん、ああ、言ってなかったねえ。あの二人は、今頃死んでいるんじゃないかなあ」

死んでるって、おいおいおいおい。冗談だろ冗談だろ冗談だろ。

あの二人は俺が勝手に巻き込んだだけで、何も関係なくて。

「そんな怖い顔をするなよお。巻き込んだお前が悪いんだしなあ。

……とは言っても、向こうも何かしらの事情を抱えていたみたいだから、一概にお前が悪いとは言えないけどさあ。でも、結局はどうであれ、関わってしまったら、駄目だよねえ。いくら、影が憎いからって。死んでもらうしかないよねえ。んふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

こいつ、こいつ、こいつこいつこいつこいつ！喜んでやがる。  
人が死ぬ事を喜んでやがる。人を殺す事じゃない。人が死ぬという事実を楽しんでやがる。

くそっ。なぜ五年前にそこに疑問を感じなかったんだ。

なぜ俺は、人を殺す事に疑問を感じなかったんだ。

「この……外道が……」

「外道？それは君も同じさあ。嬉々としてこの実験に参加したのは誰だ？自分の使命感の為に大勢の人間を殺したのは誰だ？大勢の人を殺して何も感じなかったのは誰だ？なあ、三城幸奈あ」

「違う、違う違う違う違う。それは俺じゃない。俺じゃなくて。でも、それは俺で、俺で、俺は国の役に立ちたくて、立たなければいけない、て……それは絶対で……だから……。でも、それは違う……違う？何が、違う？ああああああ、俺は俺は……私は私は……」

「くふふふふ。お前はもう駄目だねえ。『記憶』が崩壊して、記憶が出てき始めている。残念だけど、ここでさよならだよお。私は担当責任者だし、最後まで面倒は見るからねえ」

本当は、殺すのは趣味じゃないけど。と、呟いた後、男が取り出したのは、小さな小さな果物ナイフ。

蛍光灯に照らされ、鈍い光を放つ果物ナイフ。

「残念ながら、お前が愛用している日本刀とは比べ物にならないくらいちゃんな物だけとお、殺すにはこれで十分だねえ」

ゆっくりと切っ先が俺に向けられる。男のどこまでもどこまでもどこまでも、歪んだ笑顔とともに。

「さようならあ」

切っ先が目の前に迫る。

どすん。

鈍い、音がした。

俺の目の前から、鈍い音が聞こえてきた。

同時に、男の顔が歪む。

「ちよっと、これは予想外過ぎるねえ……」

男の口から血が流れ出し、胸元から、血化粧を施した日本刀が飛び出している。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ」

膝から崩れ去る男。そして、代わりに現れたのは、

「智也」

男が死んだかもしれないと言っていた二人の内の一人が立っていた。血に染まる日本刀を片手に。

「いやー、間に合ってよかったよ」

人一人を殺したとは思えないほど清々しい笑顔を向けてくる智也に、違和感を覚えた。

「あ、ああ、ありがとう」

何が、あった？

☆

「本当に、幸奈が死んだらこれからどうすればいいか困っちゃうとこだったよ」

僕は安堵する。心の底から安堵する。危なかった。もう少しで、僕の大切な人が死んでいたかもしれない。まさか幸奈が殺されそうになってるとは。

冷や汗ものだ。

「咲月、は？」

幸奈は消え入りそうな声で僕の友達だった奴の安否を確認してきた。ふむ。この感じだと、今しがた僕に刺し殺された薄男に何かしらを言われたのかな？

「咲月は死んだよ」

「……っ。すまない。すまない。俺が巻き込んだせいだ。俺が、自分勝手に振舞わなければ、咲月は……咲月は……」

悲痛な表情。目を見開き、出血してしまうんじゃないかと心配になるほど下唇を噛み締めている。

駄目だよ幸奈。自分の体は大事にしなきゃ。と、思いはするものの、はてさて、どういう言葉を掛けたら気を逸らせるだろうか？やはり、あれかな。



「そんなショックを受けることかなー？ 幸奈、人が死ぬ事にはなれてるだろ？」

「えっ？ 誰、から……」

台詞の途中で幸奈の視線は床で惨めに臥せっている薄男へと向けられた。とりあえずは下唇も開放宣言を無事に出せたようだ。うむうむ。でも、これだけだとどうにも僕が幸奈を苛めている感じになっちゃってるから、付けたしといきましょうか。

「あー、ごめんごめん。困らせるつもりは毛頭ないよ。咲月が死んだのは、結局こいつのせいでさ、幸奈は何も悪くない。さらに言うと、僕に嘘を付いていたことも悪くないし、咲月を騙した事も悪くない。何も悪くない。だって、そこには理由があったんだろ？ 僕らを騙してまで、共に行動したかった理由が」

幸奈の驚愕は止まらない。何かを訴えたいのだろう。口はぱくぱくと動いている。でも、言葉は出てこない。よし。続けよう。

「ああ、本当に気にしないでよ。別に僕は何とも思っていないからさ。そう。幸奈は何も悪くない。例えば僕の両親を殺した影の親玉が幸奈だとしても、ね」

「……」

否定はなし。架空の昔話は真実の昔話へと自動昇格したみたいだ。  
「でも、一つだけ許せないことがあるんだ」

いい加減に手に持つ日本刀の重さが煩わしくなってきた僕は、床と熱いキスをかましている薄男の背中に突き立てた。即席、日本刀立て完成。そして、幸奈が腰掛けるソファとテーブルを挟んで設置されているソファに腰掛けた。視線を幸奈と絡め合わせる。

「僕が許せないのはさ、それまで僕の人生を築き上げてきた両親を殺したにも関わらず、その責任を取らなかった事。代わりをしなかった事。引き継がなかった事。全く持って腹立たしい。別に殺すなとは言わないさ。でもな、殺すなら殺すで、きちんとその後を継いで、きちんと僕の人生を作ってくれなくないと困るんだよ」

「……」

「ん？何でそれを忘れていたのかって？」

静かに僕の話に耳を傾ける幸奈の心理を読んだ、と信じる僕は続ける。身勝手な以心伝心。幸奈の表情は変わらない。きっと正解。

「だって、怖いと思わない？自分の親が死んだのに、殺されたのに、悲しいと感じなかったんだよ？遺体を確認した時も、通夜の時も、葬式の時も、初七日の時も、四十九日の時も、納骨の時も、僕は悲しきなんてこれっぽっちも感じていなかった。ずっと、僕の人生を作り上げてきた両親を壊したのに、責任を取れない影に憤りを感じてたんだ。どう考えても異常だろ？裏を返せば、僕は両親をただの道具としてしか思っていなかったって事だし。だから僕は自分でも気がつかないうちに蓋をしていたんだ。その思いに。……だけど、咲月が死んだことで、はっきりに思い出した」

あの時の気持ち。  
感情を。

僕は異常だった。異常でした。そして、今再び異常になります。

ぬふふ。異常。

くふふ。異常。

ひひひー。

「思い出したから、どうするんだ？」

ここでようやく幸奈が開口。待ってました幸奈さん。表情は固いけど。

「思い出したから、今度はそれを受け入れる事にしたよ。だって、それが本当の僕で、真実の自分なんだから。自分を騙しちゃ駄目だよね。それに、せっかく、両親を殺した影の親玉・三城幸奈もいることだし」

それになにより、自分の気持ちに従う事は死ぬほど気持ちいい。本当の自分を惜しみなく出すことは気持ちいい。きっと、五年前の僕はその感情に浸るのが怖かったんだ。本当の自分を認める事が怖かったんだ。異常な自分を受け入れる事が、素晴らしく気持ちいいという事実を。

でも、今は違う。

僕は自分の為に生きる。僕は自分の思うままに生きる。幸奈の代役である咲月も死んだことだし。お役御免。

「そうか。はっきり言って、智也の言いたい事は理解できない。何もかも、理解できない。でも、意味は分かった。だから、聞こう。お前は俺にどうして欲しい？」

さっきまで幸奈の瞳の中でゆらゆらと揺れていた何かは消え去り、強く僕を見据えてくる。うん。いい目だ。上から目線、失礼。

「これからは、僕の側にいて欲しい。僕の側にいて、僕の人生を作っていつて欲しい。それが君の義務でもあり、責任でもあるんだから」

素直な気持ち。

少し考え込むように幸奈は視線を落とした。断られたらどうしよう？殺すっていう選択肢はないから、勝手に付き纏うしかないか。顔を上げた幸奈は口を開く。

「分かった。これから、俺はお前の側にいる。何があっても側にいる。それで、いいか？」

「うん。ありがとう」

さあ、ここからいよいよ人生第二章の開始だ。

## エピローグ

肌を切るような冷たい風が吹きすさぶ中、僕は家路を歩いている。今日も何事もなく学校が終わり、平凡な日常が過ぎていった。

「ただいま」

家にたどり着き、玄関のドアをゆっくりと開ける。

「智也ー。おかえりー」

ドアを開いたと同時に、黒い物体が僕へと突進してきた。

「うわっ」

「おかえりおかえり」

「じゃれつくな、幸奈」

僕の胴体に引っ付いて離れない幸奈を引き剥がすように肩を掴み力を込めるが、悲しいかな、彼女の方のマッスルパワーが上らしく、微動だになかった。

「だって、智也がいないと俺は駄目なんだよー」

抱きついたままの状態で、僕の顔に顔を近づけ、何とも愛くるしさ全開の目と台詞で訴えてくる幸奈。僕としては、それよりも押し付けられるお胸様が刺激的過ぎるんだけども。

「やっぱり、一緒に学校も行かせてくれよー」

「駄目だ。幸奈が一緒に来たら浮きまくるだろ？」

「うー。それに、俺と一緒にいないと、影に襲われた時大変だし」

「その時はその時だ」

再び、うーと唸る彼女。その頭を僕は優しく撫でる。

う、うん。ご覧の通り、僕と幸奈は、僕の家で共に暮らしている。あれから、数ヶ月が過ぎた。

あの時、幸奈は僕と共に生きることを選んだ。その理由は何なのか？罪滅ぼし？同情？責任感？きつと違う。だって、同情や責任感だけで、両親が死んでも、友達が死んでも何とも思わない奴の側にいるなんて、僕なら耐えられない。でもだからと言って、わざわざ

知ろうとは思わない。

彼女が何を思っているのか、僕は知らない。

彼女がどういう理由で僕と一緒にいるのか、僕は知らない。

でも、それでいい。うん。どうでもいい。僕の傍に幸奈がいる。それだけで僕は十分なんだ。彼女側の都合はどうでもいい。

ああ、そうそう。最近、日本各地に出没していた影が一斉に出なくなったという報道が昼夜問わずに流れている。これはおそらく、薄男がいた理由にも重なるところだろう。

ただし、僕が暮らしている地域では、いまだに影が人々を殺しているらしい。それが幸奈のせいであるのは明白だ。

うん。ただそれだけ。事実報告。事後報告。どうでもいいこと。それは、その事実はそれ以上でもないし、それ以下でもない。ただ、そうであるだけ。

だから、今日も僕の関係のないところで他人が死ぬ。それはどこまでも仕方がない。

だって、僕が幸奈と一緒にいるんだから。仕方がないだろう？

☆

結局、俺が誰なのか、分からないまま、俺は俺として生きている。信じていた事実は崩れ去り、『記憶』は偽物だと分かったのに、俺の中には何も戻って来なかった。

何もない。空っぽ。じゃあ、俺は誰だ？俺は私か？俺は僕か？分からない。今までの自分は自分じゃなくて、これからの自分も自分じゃなくて、何もかもが自分じゃなくて、俺が信じてきた自分は俺じゃなくて。

じゃあ、俺は誰だ？分からない。だから、俺は智也に依存する。智也は言った。俺に側にいて欲しいと。だから、俺は側にいる。そして、これからの自分を智也に求める。

意味をくれ。智也。

これからの俺に意味を。俺が俺である意味をくれ。

お前が俺の事をどう思っている、どう扱おうとも、俺は側にいる。自分を失った俺は、お前の存在に依存する事で、俺になれる。

共に行こう。

共に生きよう。

これから先、何があろうとも、俺に、俺が俺であるという安心感を与え続けてくれ。

お前が俺の意思となってくれ。

なあ、智也。

☆

他人がどうなろうと、どうでもいい。

それは他人で、それ以上ではないのだから。

君だけが側にいて、自分が自分を惜しみなく出せばそれでいい。お前だけが側にいて、自分が自分である事をかみ締められればそれでいい。

それは何事にも変え難く、気持ちのいいもので。

それは何事にも変え難く、素晴らしいもので。

だから、いつまでも、どこまでも一緒に。

僕だけ

俺だけ

が

満たされれば、セカイはそれだけで十分なのだから。

## エピローグ（後書き）

紹介のところで書いてますが、これはとある新人賞に投稿したものです。

展開をほとんど気にせず、ただ自分の好きな感じで文章を書き連ねた結果、このような小説（？）と呼べる代物かはわかりませんが、とりあえず生み出されました。

もちろん、投稿先の編集さんから手厳しい評価をいただきました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8697v/>

---

セカイはそれだけで十分なのだから

2011年8月20日03時33分発行